51号附録: 噫　恩師 小川勝陳先生

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38497

噫 恩師小川勝陳先生

目次

一　小照及遺墨……一頁
二　發病餘影……五頁
三　恩師終焉之記……一二頁
四　葬儀畧記……一九頁
五　恩師之性行……二九頁
六　家系及經歷……三八頁
七　病床餘瀝……四五頁
八　病床筆談……五六頁
九　追悼法會……六六頁
十　遺骨奉安……七七頁

命長けれは辱多し長く
とも四十に足らぬ程に
て死なんこそめやすか
るべけれ——兼好

はしがき

○某日九度五分の熱をも敢てせず本誌の爲に主ら筆把らるゝ小原芳雄兄に逢ふ、曰く小川先生の爲に何か書き給はぬ？……左樣經歷にても少し書いて見ん？……とのたよりなき話頭一轉遂に斯るはしたなきものとなれり、節により章により事の粗なるあり密なるあり、文體亦格を異にし調を異にするものあるは一に筆に任せて思の儘を折に觸れ時に應して綴りたるに因れり、唯恩師か聖德を瀆すの罪大なるは深く慙謝する處なり

○直情徑行、左右に顧瞻して人の意色を搜り巧に諂言諛辭を吐くの智なきは余か特性なり、其既に口を箝し腕を斷たるゝや送別の席上、今後本誌の爲には筆把らさるべし只先輩知友よりの通信は其厚情に報ゆる爲め及ふたけ之を載するにつとめんと誓言せり、さるに今恩師か爲に禿筆を弄する、事甚た矛盾の觀あるも、余や夙に恩師か爲に働き恩師か爲に生き恩師か爲に爲さんと欲する處を爲すもの恩師か爲には一死尙辭する處にあらざるなり、誓を破つて恩師か爲に之を爲す余は衷心省みて愧つる所以を知らさるなり、此末とても事苟くも恩師にかゝるものあらば之を再ひし之を三たひする露厭ふ處にあらさるなり

○恩師自筆のものにはいろはと片仮字と混し又○、」等の記入あるは凡て其儘として存せり、敢て之か改竄、削除をなさゝるもの一に恩師を追望するの情に出つ、又他意あるにあらさるなり

○終焉之記一篇は夜來看護し奉りし田宮か覺ゑつる筋書をたよりとして綴りたるもの其談話の如き殆んと之に據れり今之を明にして其好意を謝すこと爾り

明治四十一年十一月五日　　金城療病院にて　門下生　八田智証謹識

因に恩師か逸話、遺聞又は恩師に對する感想等は力めて本誌雜誌部又は小生宛御送附あらん事を大方に向て廣く切望す

○小照及遺墨

卷頭に於ける　小照五面は（四）（一）（三）（五）（二）の順序に其撮影年月の前後により排列せしものにして

㊀は去廿七年恩師第四高等學校醫學部教授として當地へ赴任（天長節當地着）せらるゝに際し東京本郷、四中黒寫眞店にて撮影せられたるもの、裏面には「明治二十七年十月廿五日寫、自分保存品」と自署し給へり

㊁は廿九年天長の佳節第四高等學校陸上大運動會職員競走に於て一等賞を得賞牌を佩ひ給ふ處にして、仝廿九日賞品なる寫眞劵を以て當地中町小池寫眞館に於て撮影せられたるものなり、卓上の包封には「職員競走壹等賞」並に「職員競走壹等賞運動會狀寫眞劵」と記るされ其前にスプーンの横はるを見るべし、御隱居樣曰く勝陳（カツノブ）も其頃は元氣旺盛にて野田（忠廣）サンと二人で豫行練習とか云ひ座敷中をハヂ回はり互に一等賞を取るとて競ひました云々、寫眞の裏には單に「明治二十九年十一月廿九日寫」とのみあり

㊂は三十八年七月一日夜使して小生に贈られたるものにて添ふるに一封の書を以てせらる、其の一節は則ち遺墨として下方に掲くる處の如く以て恩師か寫眞觀を窺ふへく以て愚庵居士（俗稱天田五郎、山城深草之里に草庵を結ひ先年寂に入る）を深く敬慕せられたるを想ふへし、寫眞の裏面には一首をものせられ「明治三十八年五月十六日寫、初老といふも耻かし上髯に霜降れりとは思はさりしを　未曾藏生　呈八田君」とあり

㊃恩師久しく日本赤十字社石川支部看護婦養成及特志看護婦人會に講師たり、卅八年十月十五日閑院總裁宮殿下御台臨の際特別社員に推薦せられ給ふ、撮影年月は不明なるも右特別社員章帽用より推せはられ以後なるべく、奥樣か一昨年の春撮つた樣に思ひますと申さるゝにより或は其然るを思ふべし

㊄は本年四月廿九日午後二時金澤病院樓上會議室に於て大日本私立衛生會養成産婆看護婦卒業証書授與式あり、恩師講習所長として之に臨み小生亦講師として之に列す、式後婦人科診察室北窓の下に於て記念の爲に撮影をなす實に恩師か病床仰臥に先立つ厘に旬日恩師最後の撮影なり、當日尚小生の爲め送別記念として特に婦人科一同撮影の約を以てせられたるも折惡しく寫眞店主の種子板失念の爲め餘儀なく止みたる事あり（終焉之記參照）

門標　三十八年十一月味噌藏町片原（從來は町名番地をも併記し給へり）より下本多町六番丁金澤電氣會社向に轉居せられたる時新に作り給へるものにして昨夏現住所なる長町一番丁に移られたるも門標は依然として其儘なりき、御隱居樣の御話によれは氣に入らぬから書き直さんと云ひつゝッイ其儘に及ひたるものなりとの事なり、然し行草のものは他に求めて得さるなきも恩師か眞書は殆んと得易からず即ち特に之を掲くる事とせり、時に恩師を訪ひ時に門前を過きりし者今之を見てまた多少の感なきにあらさるべし

遺墨　向て右は本年五月七日憂然として吐鵑血に啼くの思し給へし後、又左は四月十四日兎角我身の勝れさせ給はさるに就て平素の所懷を腹臓なく初めて打明け給へる共に岡本氏宛

の親書の一節なり、「發病餘影」に就て之を對照し見ばそゝろに故人が俤偲はれて感懷當さに盡きさるものあるべし

下方のものは㊂の下に述べたる如くにして又詞藻の一端を窺ふに足るべし、筆蹟流麗讀過し難きものなきやを恐れ試に之を擧くれは左の如し

小照一葉呈上致候小生由來半身を寫さず況んや顏のミをや謂にらく顏面ハ其人ニあらすいな其人の全部にあらす世人面識といふて心識といはすアゝ噫予の固ナル久シ矣又飜て思ふもとこれ虛影のミ平面のミ立体にあらず實相にあらすナンゾ全と半とをとはん……五月十六日は生が生れる苦ミを解脫したるの日なり……いつも胸に浮ぶは

うつし見る鏡に親のなつかしき

わか影なから片身とれもには

眞箇に然り〳〵〳〵生常々每々之を誦して或ハ打泣キ、或ハ慰ム……嗚呼父よ遠く去て在まさすいな〳〵眼前ニアリ脚下に在り只々口語り手フレ得サルノミいな〳〵其口其手其……皆コレ父ノミ而して亦コレわれ!!!頃日豚兒の小照ニ題すらく

われにしてわれには、あらぬわれなれは

われとな思ひそわれと思によ

亦是同一見地」

生愚庵居士の扇を有す詩あり其三四にいはく

一衣一鉢三千界青山何處不故鄉

居士は會津の亡命戰後父を尋ねて四方を遇遊し足跡天下に遍ししかも相逢ふ能はす遂に發心して禪門ニ入レリ云々

生ハこの結句に就て大ニ得たるところあり毎々居士を以て未見の師となす不思筆して玆に到る其何の故たるを知らす

七月初一夜認

智證學人　机下　　臥牛

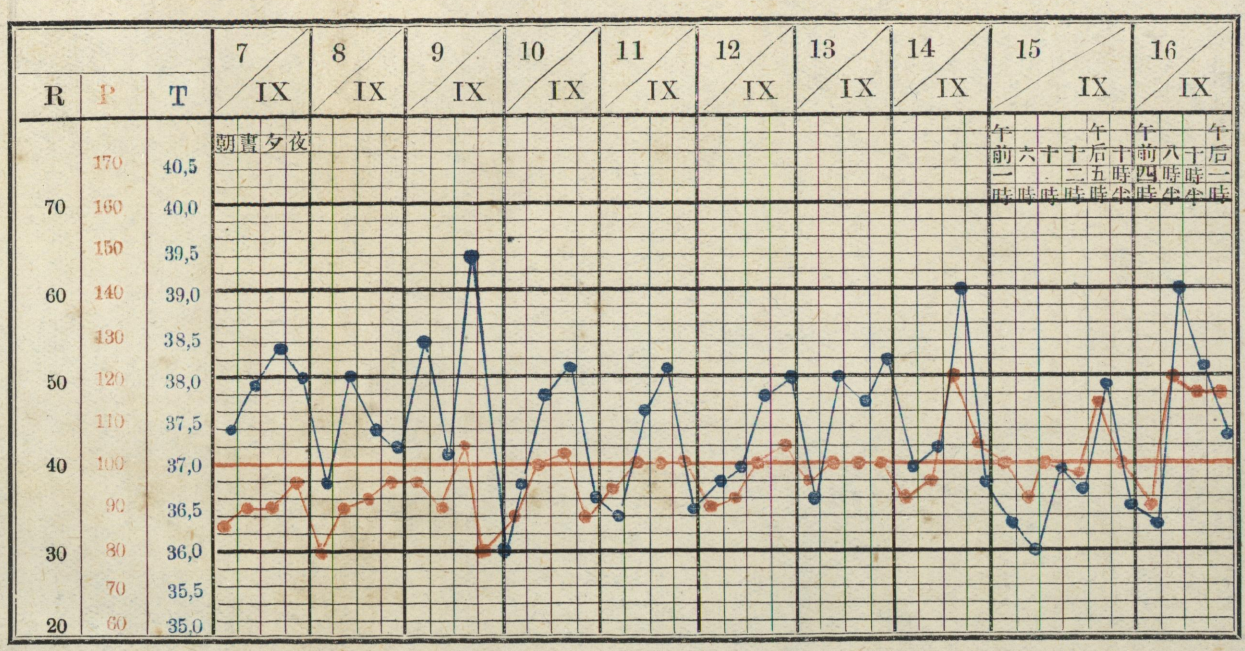
夜三更獨坐聽雨懷廿余年前舊作

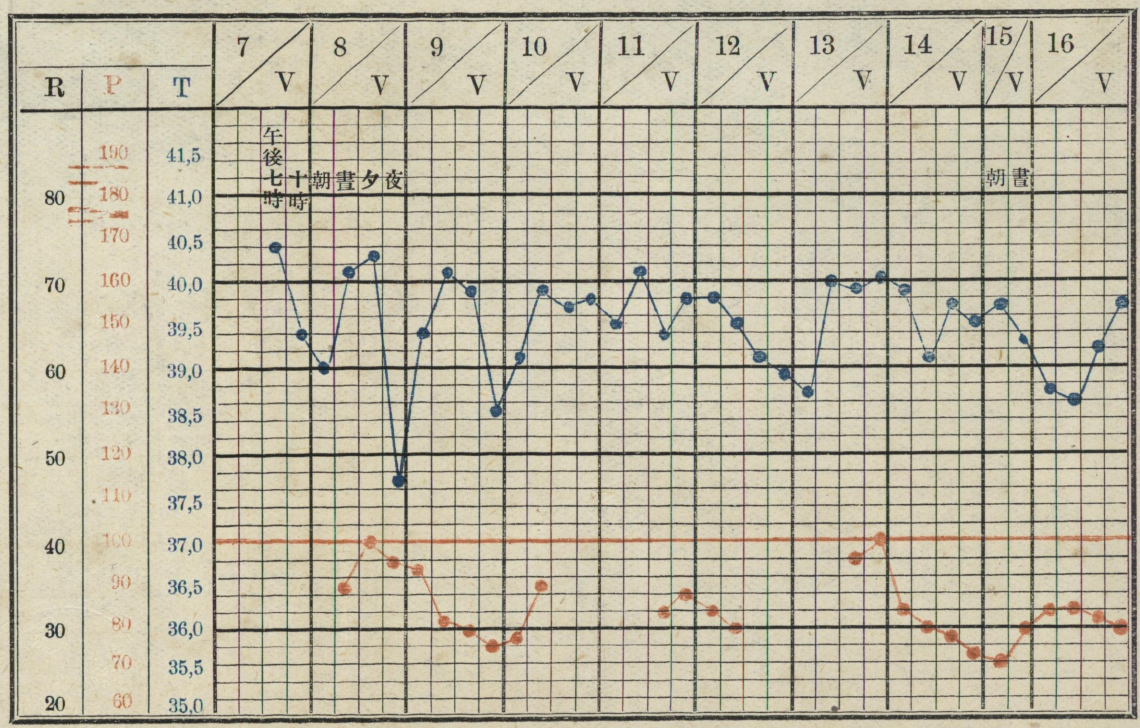
茫々故山遠　渺々前路遙
胸中雲漠々　戸外雨蕭々

即興

小夜ふけてひとりしすけき五月雨の
音靜かなる世にもあるかな

今死十日と初病十日間の體温及脈搏を示す（表には數時間毎に側定せられあるも今其中より左の如く抜出せり）





（下表―間々檢脈ふき處あり、又15/Vは午後の測定記する處ふし）

○發病餘影

雲かとばかり打眺められたる櫻も一夜の雨に殘りなく散り果てぬ、吹く風い花の薫をれくらねど見渡す限り青葉若葉ゞ萠に出つる頃と五月の七日朝恩師憂然として裂帛の響あり、飛ふ鳥の塒に歸る夕つ方またゝくひまに高熱襲來(四十度四分)稽留週餘稍衰へたるも時折出つるあかきもの廿六日まて引續き、九天直下憔悴の狀見るもあはれの御すがた

水無月初め方より九度の上を昇らすなりけるも尙八度內外あり十四日の朝六時初めて七度に降り二十四日正午六度五分の聲を聞く、爾來七ー八度の間を上り下りの快ろく人も歡ひ自らも喜ひ給ふいぢらしさ

槿花一朝の夢ならぬ糠喜とはさてもつれなき熱はまた八月七日八度一分越にて十二日九度三分となれり、之よりは賴み少なき消耗性且つは不定になり果てつ、梧一葉の秋の風九月十六日にぞ及ひける

人生浮萍の如く水流また急箭の如し、さても恩師がいたつきの斯くも劇しき變り方夢に夢見る心地すれその因り來る源は昨日今日にはあらさりき、岡本氏に眞情を打明け給へる水莖のあとや這般の消息偲ふべく、去年の八月末つ方患ひ給へるヘモロイドそれより勝れぬ榮養の此春よりは尙も亦人目に立ちていやまさる異常のほども偲はれて休ませ給ふ數も殖へ彌生の空や卯

の月の人は花にと狂ふ頃獨り御胸いたみつゝ引籠み給ふぞいたわしゝ

花褪りゆく廿一日の午下一時子宮全摘出術あり、メス執れわれ助けんと宣ひたるも道理なる、明けて輕熱襲ひ來るわれ然るなり師の君のなどで困憊なからめや、此日限のわが命心たきなく養ふに引き代へ恩師か無理〳〵と知り給へつゝ院に出て親しく診察なし給ふ御心のうちぞいたましき

廿七日金谷館にて數にもあらぬ我が爲に送別の宴を催ふさる、席上恩師にはピラミードンを服用し給へりと聞くも涙の種子にこそ

五月三日之月曜なり師の君にゝ此日親しく登院診察、翌日胃腸の加減よろしからす、靜養遂に五日六日と打過きて霹靂一聲天外之響

以下三通の消息は恩師より岡本京太郎氏に致されたるものゝるも、恩師の病氣の眞相や初より單に Pneumonie とのみ云ひて堅く秘せられたるものゝれは今之を公にするはいかゞと思ひ卷頭の遺墨にも其差支ふしと自信せし部分のみを出たせし次第なるが、このたび岡本氏が今は之を公にするも差支ふかるべしとの詞により謹んで全文を掲くる事とせり、見ん人乞ふ其心して讀せられん事を

○消息一

拜啓每々家族共の病氣に付ては細大共御配慮を懸け御蔭にて安心罷在候八田氏事も御蔭により緣付先キ都合よろしく取り運ビ是亦同人ト共ニ銘謝致候所ニ御座候愈同氏の辭表ハ昨日手許迄受取本日山崎氏の診斷書出來次第院長に差出す都合ニ御座候

○勝利義昨日虫にてもサヽレタルニヤ陰莖包皮ノ尖端浮腫樣ニ腫脹シ昨夜ハ爲メニ夜半ニ目覺メ(瘙癢ニ堪ヘス老母ニガリ〳〵搔テクレトテ叫ヒタリ)今朝ハ當人忘レタル如ク候へとも唯今放尿ノ際檢スルニ腫脹部一層進行增多致候樣ニ御座候」老母も腹部一ケ處、下婢ハ背部一箇處同しく虫ニサヽレケン余程發赤腫脹痛痒シトノヿニ御座候

○最後ニ御願致度ハ小生事ニ御座候御承知の如く小生は御覽の通りの體格故潛心注意ハ不絕致居候故にやサシタル事もナク經過致候處一昨年輕度ナカラ黃疸ヲ患ヒシ頃より(當時モ貴下ニ御心勞相掛け其前後にや「インフルエンザ」ナリシカ一日四十度近クノ熱發ニテ全身倦怠殊ニ腰部非常ニイタク貴下ノ「マツサージ」にて大ニ快ク感シタリシヿ今モ記憶セリ——當時胸部モ一診ヲ乞ヒ何カ異狀アリヤノ問ニ心音 "Unrein," ト思ハルトノ言記憶致候——往年當地ゟ來任ノ前感冒ニカヽリ一友ニ診セシメシニ右肺何レノ處ナリシヤ一小部分呼吸音粗裂カト思ハルト申サレタルヿアリ其外從來自覺他覺共何等ノ徵候等ハ認メラレズ候)物事惚て不性となり昨夏肛圍膿瘍ヲ患ヒシより一層虛弱となりしやに自覺被致候(多年事每ニ貴下ヲ勞する老母ノ疾病に付ては外平氣ヲ裝フ丈ケ內苦痛ヲ感スル事甚シク老境ニ於ケル宿痾不絕薄氷ヲフムノ感アリ近來ハ御蔭にて老母ノ方比較的却て都合よろしく老母却て小生ノ疾ヲ危ブム樣ニ相成リコレ亦苦心の種ニ御座候)餘事ハサテオキ先日加女子發病の夜(三日)小生全く不眠ノ故ナリシヤ翌日感冒ノ氣味アリ四日ナリシヤ五日ナリシヤ九度四分ノ發熱アリ翌日ハ八度四分となり翌日ハ七度七八分となり氣分も差

したる事なきと病氣ヲ可成老母ニ隱蔽致し度存念より平常ノ通り働作致居り公休ヲ幸ヒ七日迄家居致居候八日は始業日故登校全院内ノ診察抔致候爲メ少しく疲勞翌九日も出勤產婆試驗抔致し夕刻ニ至リ候處一層疲勞致候都合故十、十一日ノ兩日ハ休ミ十二日ハ大ニ快ク午前午後共私會アリタレモ用心ノ爲メ不參昨十三日ハ月曜にもあり校長にも會ヒタシ氣分もアシカラサレハ出勤夕刻迄在院歸宅後再ヒ熱感アリ(八度四分)夕飯後三木三郎氏來談「八田氏ノ事に付小生ヨリ成行ヲキヽタシトノコトニテ凡ソ二時間も對談致候後フト(同氏も宮田氏も近頃インフルエンザ後助膜炎!?ヲナヤミタル由)右側胸部ノ下方ニ一小部不快ノ鈍痛ヲ覺エ殊ニ咳嗽時ニ幾分著く感し呼吸多少促迫ヲ覺エ(呼吸面狹クナリタルヤノ感アリ)候樣ニなり肋膜炎ノ初期にもやと思ハレ候まゝ平常より早く就褥致シ安眠ノ後今朝覺メ候ニ氣分爽快にて體溫七度一分位食氣ハナケレモ二椀半位、鈍痛部ハ矢張リ同處ニアレモ昨朝程著からず」咳嗽ハ昨今時々アリ少量濃厚の咯痰咯出シ難ク爲ニ故ラニ咳嗽することも有之候要するに小生等ハ既ニ何レニカTb潜ミ居ルと信する方至當ナルヘクSpitzeハ如何哉不知候へとも「ベルツ」ノ所謂 Pleuro—Pneumonie 樣ノモノニテモアラスヤ或ハ思の外ニ病竈ヒロガリ居リ昨今 Misch Infektion ノ爲メニ多少ノ熱發起リタルモノニヤ何レニシロ小生ハトクヨリアキラメ居リ候へとも唯老母ニ小生ノ重疾アルヲ知ラシメサルヿ唯一ノ願ニテ必竟老母ヲ見送リテノ後ナラハ其翌日眠ルモ亦 Glück ノ大ナルモノト信シ居リ候實ハ近頃貴家ニテ一應診察ヲ受ケント存居候へ共餘リニ隱シ過キテ家族ノ心配ヲマス

ヿアリテモ心ナラスト思ヒ却テアカラサマニ當時流行ノインフルエンサニ托シテ拙宅ニテ一應受診ヲ乞ヒ度ト存シ不思長キ枝葉ニ渉リタルヿ迄モ申述ベタルハ前述ノ次第故別日ニ小生ニハ貴家ノ所見ヲ腹臓ナク御洩らし被下度老母始メ妻ニハ唯アリフレタル病氣ノ如ク御申渡シ願度又他人ニモ御洩らし無之樣願度候

四月十四日午前認　　小川生

岡本老兄　机右

○本日御都合次第御來診相願度候也

○今朝九時頃ト十一時頃ト二回ニ出テタル二男ノ尿差出申候

先日來今朝迄便秘の處十時頃軟便一回アリタリ

○消息　二

拜啓　御蔭にて追々輕快致候處今朝六時半頃覺むると同時に突然○○中量始メ何氣ナク一咳シタルニ暗赤色ノムシロ凝○トモイフヘキモノ少量引キ續キ咳嗽頻發して其都度殆ト純○出て候まゝ人の氣付かぬ間ニ便所ニ參り紙にて暫らくトリ候ニ後には追々薄クナリ唾液トマヂリ(痰ハ殆トナシ)候樣ニナリタレハ早速顏洗ヒナカラ食鹽少量ヲのみ尙先日ノ頓服ノモヒ劑ノ半量ヲヒソカニ服用致候(Hustenreiz ヲ mild ニスル考ニテ)老母も下婢も昨夜より今朝にかけ衂血致候由聞及候に付自分も同樣今朝衂血シタリト糊塗致置候(○○ノ

「誰レモ知ラズ」唯貴下ニノミ眞相ヲ打明ケ候故其御つもりにて御聞取被下度又御他言も御無用ニ願度候

自覺にては右胸部之中程異樣ノ感(所謂温感、壓感?)アルカト思フ位にて昨夜來熱感もなく殆ト平常ト異ナラズかねて覺悟致居候故殊更驚きも不致候へ共如何にしても家人ニ知ラセヌ内ニ止血モシ蓐ヲ離レント念切ナルノミ」取リ敢ズ願度ハ「麥角丸」等にても戴き置度午後御手スキニ相成候ハヽ御來訪仰度(今スグニテハ却テ家人ヲ驚かす故ワザト午後ニ願度候)老母もかねて申シタルガ「貴下以外ノ人ニミテモラヒ度ナシ」ト小生も同樣故他ノ人ニモ診セヨ抔ノ御口上ナキ樣コレ亦預メ願置候」生ハ天命ニ安シテ憂ヘス懼レサルつもりナレ𪜈唯家人殊ニ老母ニ此疾ヲ知ラセ度ナクこれのみ畢生の心願ニ御座候

唯前年來老母〇〇ノ際自分モ片原町住の時入浴中突然セキシタルニ同樣〇〇???シタレ𪜈早速食鹽チノミ其マヽ眠リタルニ其後何の異狀ナシ」トイフ「チ語リテ老母ヲ慰安シタル「アリキ

○昨日ハ朝カユ二椀午後と夜ハウドン二椀宛」イヌル前腹部幾分膨滿の感アリキ」

右は五月七日午前認められしものなり

○消息　三

今自覺的苦シキ「ハ例ノ喉頭以下邊ヨリ時々殊ニ突然シカモ嚴烈ニ衝キアグル如ク咳嗽アル「ナリ只今ハ一寸樂ナレ𪜈多分局部ニブルート、シライム、タン積ルニ從ヒシゲキ愈々

加ハリ兩者共段々大トナルヿ此兩三日來ノ定例ナリ可成セキハサケ得ル丈ケ避クレヒカクナリテ全ク反射的ノミテドウシテモトドムル不能コレ昨今ノ最苦痛トス」イクラセキ烈キモ痛ハ殆トナク唯ツキアグルヒモシ手ノ口頭ヲ蔽フナクハ Blut 必スヤ口外ニ迸出セント思ハル位ナリ」カヽルコト兩三回モアリタル故アラカシメ紙テ拭ヒ取リ他より全ク見得ヌ樣ニナシ其都度消毒サシテ便所ニ遺棄セシメ居レリ(其都度モヒ一包ヲ水藥ニテ頓服シ

一時間後麥角丸二〇ヲ頓服ス其代リ其後ハ暫らく樂ニシテ殆ト無病ト思ハルヽ如シ

○只昨夜半ノ如キ卒急ニ起リシヒハ自ラ保護スルニ急ニメ看護婦ニ命スルヿモナラス(アラカシメ命シオクヿモアレヒ)又々永くに渉ル爲メ看護婦モ疲勞シ折角ノ御苦心モ一寸水泡ニ歸セシムルヿナキニシモアラス」就而ハ甚タ恐縮ニハ晝間ハカンゴ婦二名ノ交代ヲ乞ヒ(例セハ今日國府ニメ明日白崎ノ如キ)夜間ハカンゴ婦三名ノ交代ヲ賴ム更ニ大至急貴下ニ御報ラセスル迄ニ起リタル出來事ニ對メ多クハ小生ノ自箇命令ノ腦力ナキ場合ト同時ニ看護婦ノ示導等ヲモ御依賴致度甚タ恐縮ナレヒ恰モ非番中ノ方ニ可然御願致サンカト考候

餘リ自分勝手ナレヒ家狀實ニ御覽の通りにて不得止次第御推恕可被下候

尤も醫員諸君の御依賴ハ勿論小生ヵ申出ツヘク候

○右ハ貴下蒲柳の身ヲ以テ內外ノ劇務ニアタラレ殊ニ此兩三夜ハ再度モ御見舞被下候義心カラ感謝ノ意ヲ表スルニ付テ(貴下ノ居ラルヽ間ハ一入爽快ニメ誠ニ心丈夫ナリ)亦貴下

ノ健康ヲ慮ハカレハナリ然シイツカハ夜中貴下ノ夢ヲ驚カスコモアラン

恩師には偃臥以來堅く面會並に談話を嚴禁しつゝありし爲め日夜診察の岡本氏と雖殆んと全く談話の交換は避けられたり、今此消息は手紙にあらずして筆談ふり即ら思ふ處之を口にすべくもあらざるに任せ之を記しおきて岡本氏に示されたるものなり、月日の記入ふき爲め充分定かならざるも五月十二日のものならんとの事ふり、

五月廿九日夜恩師急に呼吸困難あり死期到來と自ら覺えぬと後にて申されき、翌夜より佐々木先生の恩召により全醫局員三木三郎、林篤、齊藤房治、丹羽直の四氏交代宿泊親しく看侍して萬一に備ふること實に廿五日に及へり、我等は佐々木先生か勞勍と共に四氏か厚情に向て甚大の謝意を表するものふり、因に佐々木先生は五月十三日初診し給へり

○恩師終焉之記

九月十五日　午後四時看護婦田宮全佐々木の交代に罷出つ折ふし記念寫眞(去ぬる五月卅日金澤病院職員看護婦使丁中勤續廿年以上に及へる者の爲に催せる祝賀會寫眞)を持ち侍りしに「今隨分氣分かヨイカラ直ぐオミセ」との仰せあり親しく手に取り給ひ「大ヘン皆がよく撮れてエル嗚呼私もモー一ケ月病氣を遲くすると此中へハイルノデアッタニ惜しいことした勝手の方へ出さずにシマッテ置けよ」とて奥樣にろ渡されける

程なく是非起しクレよとの仰せあり、いたつきの御床に臥し給ひてより日既に久しく其間三伏

の暑さにも未た曾てサル仰せなく二六時中いと靜に仰臥し給ひけるに、さりとて切なる仰せ負き奉らんも心苦しくセメテ岡本氏の來診までと諫め奉りしも胸の痰を皆一度に出し度いから是非に〳〵との仰せ詮術なく身體上半部を半臥の位置まで起こし參らせしに之では目的達しかぬる故今少し起せとの仰せ、本意なくも尙直角の位置まで御起こし申上げしも更に咯痰出てす直に元の儘に復し奉りけるに暫くの間多くの咯痰出づ、たまるを待つて佐々木歸らんとせしに暫らく待てよととてとゞめ給ひ奥樣に何か命せられぬ、勝手もとの方に出しある旨申されけるにサラハこゝへ持ち參れとの仰にて病床の邊までシャンペンサイダ一瓶、小コップ三個盆にのせてゞ運はれける「誠に臭いヤラ穢ないヤラの面倒をよく見て呉れる之は醉ふものではないから三人(宮本、田宮、佐々木の三看護婦)で飲んでクレ、奥樣にも酌せよ皆飲めよ」と宣ひ三人共まことに味よろしく斯く飲み申せしとて空き罎を逆まにして御挨拶しつるに殊の外嬉しき御かんばせにて「私の側で飲んで誠に氣持がヨイヨ」と宣ひけるも打續く咳嗽咯痰に一ぎわ苦しさあまる御いたわしさ、かゝる中より佐々木に「ツマラヌ事で足を止めた早く戻つて休んでクレ」との御心づかひ勿體なくて賤か女にも涙の出つるを覺にさりきと云へり

咯痰暫し治まりて後上田さんは經過か良いかとの御尋あり日に〳〵御快方にて尿閉も今日初めて通し大ヘン喜ひ居らるゝ由看護婦の申上げしにサモ御みづから通利せしかの如く喜はれ「ハ其はヨカツタ私も尿閉を聞いてドンナに氣持が惡からふと實に察して居た然し年が廻つて居るからドーカ良い經過ガトレヽバ良いが」との御案じあり

七時頃豆腐の餡カケと少許の茶粥を啜られ定藥(實菱劑なり、尙ピラミードン、タカヂアスターゼ、安息香酸、炭酸グアヤコールの合劑及結麗亞曹篤をも供ふ)をも召されけるに咳嗽喀痰始まり

○○○
翌十六日　午前二時頃まで五分間の止み間もなく打續きたり、ケ程長時間續くことは今晩か初めやと仰せられ如何にもセッなく如何にも苦しき御有樣御苦痛の劇しきほども偲はれて只涙の外なく、日頃氣丈夫なる御老母樣には蚊帳の外にて忍び泣きして一夜を過されけるが如何に恩師のサトリ給ひけん「れ母樣は其處に居ラッシャルのか私はモー大分痰が出まして樂になりました」と申され「ア、それぢやいつて休みましやうよ」と二階に上られたるも再ひ續く咳嗽の音に心も心ならず蚊帳の外にて含嗽のれ茶の手傳なと只管我が子に知らさじとつとめらるゝいぢらしさ、あはれ燒野の雉子夜の鶴我子を思ふ親心情けのほども偲はれて側に見る身の胸張り裂けんばかりにてセキ來る涙とゞめも合へず

二時頃になりいつまで苦んでも詮なし一層横になりて出し盡さんと申され離被架も取り除き横臥になり給ふや膿樣喀痰膿盤に半ば過くるほど一時に出てぬ、餘りに其量の多きサテハ如何あらんと打守り居りしが、續いてトギレ〳〵に含嗽に混して出つること三杯「ア、之で樂になつたから梨子を食べると宣ひつゝ三十分間ばかり眠らる目覺めて四五ヘギの露を取られ之は岡本さんから貰ひし品や誠にウマイとて喜ばれ「私はモー之でヨイからお前さんら其をおアガリ大層ウマイよ」と仰せられたるも看護婦共の應へのみしてヨクも得取らざりしに「其はイカン人が食べーと云つたら直ぐ食べるものよ」と重ねて仰せらるゝまゝ早速頂戴大ヘンおいしい旨申

上けしに「良い梨だ」と賞め給ひ、今何時だとの仰せに三時過と御答申上けし處「モー夜か明けるなー」と宣ひ俄に横になりて膿痰咯出約二百瓦、其間一時間餘りに及ひぬ

噫殘んの月淡く西にかくれて夜はほの〳〵と明け渡りぬ朝霧深くとぢ罩めて葉末に結ふ白露は旭も待たで散りやすし、こゝ旬日來殊の外なる御やつれあしたゆうべの苦しみに加はり止まぬ衰弱、疲勞、げに骨と皮ばかりなる御憔悴右の頰より左の頰が見に透くまでに衰ひ給ふ涙なる、かくて再ひたら〳〵と夢路に入り給ふこと半時ばかりにて覺め給へは咯痰胸にさしせまり呼吸困難甚しく脈搏細小疾速となり今にも窒息し給ふかと、危ぶまるゝ心なさ、加ふるに折惡しく烈しき戰慄に次くに惡寒甚しく起り一時間の後熱發すること三十九度一分急き岡本氏の許へ使して解熱劑を乞はしめたるも間も無く三十八度一分に降れり

時移るにつれ御氣分も快方に向はせられ十時頃岡本氏來診せられけれはつとめてニコヤカに病症に就て御物語あり、後「カスター」一椀次て定藥を服用し給ひ看護婦に「嗚呼誠に長々た前さん等に汚ない世話をして貰つた私は實に滿足ぢや」と仰せられけるも胸迫りて何んと御答も致しかね、稍暫くして左樣なこと仰せられては御返答の致し樣もありませぬと申上けるに「其代り今に立派に治つて見せるよ皆の人に報ゆる爲にもキット癒るよドーデもヨボ〳〵と歩ける樣になつたらば婦人科一同で寫眞を撮るよ、八田さんの退かれるときに寫眞を撮らなんだつけな誠に殘念した私も治つたら暫く或一方へ身を寄せて養生する」と前後曾てなき愉快なる語調を以て明に宣ひけり

折しも配達せし大坂新聞(御就床以來絶待的安靜を要する爲め堅く面會絶謝の上談話はもとより新聞の如きも凡て之を禁し恩師また克く之を嚴守せられしも一時御輕快人々聊か愁眉を開きし頃より折々新聞雜誌音信など御目を通され又徒然なるまゝ書き記るさせ給ふこともありき)にて目を止めさせ給ふ處へ御老母樣見にたてまつりければ「誠に樂になりましたミンナガ種々と手ぬかりなく世話して呉れるものですから割合苦しく感じません昨夜の苦しみはミンナの諫を用ゐずと不行儀をやつた罰でした全く私が惡るかつたのです」と乎仰せらる

晝頃看護婦宮本葡萄を捧くへく外出せんとせしに「ろれは結構だか二人共側に居ないと心細いから行くなら早速戻つて呉れ」と申されウト〳〵と眠り給ふほとも無く醒覺せられけれは良く眠られませんかと奥樣の尋ねさせ給ふに「態と自分で覺ますのや又朝の樣なことがあるとコワイから」と答ひさせられ次て「モ大ヘン疲れたからかまわずねるからね前さん等ヂーット側に居て呉れ目の覺むるときにソコラ一ぱいに痰か押し出るも知れんぞ敷物をあてゝたいて呉れ」と仰せられし故御心配なく暫く御休み遊ばせおつむりが治まれはまたれ疲れがなをる丈けれよろしいかも知れませぬと看護婦の申上けゝるに「ア誠にミンナがよく世話をして來れるから喜んで居る」(此御詞は今朝來三度目にして從來かつて例なき處と云ふ)と仰せられ一時半ばかり靜に御睡眠あり、目覺め給ふもいつになく喀痰迫り來らす此度は御樂ゑお目覺めになりましたと申上けゝるに「イヤ〳〵ろうでないよ胸か一ぱいになつて居る大便がしたいドチラから出そうか」と亦復苦しまれ給ふほどに葡萄と小細工の箱を宮本の持ち歸り此箱は八十四才のれ爺さ

んか仕上げましたのですと申上げ見せ奉りけるに御苦痛の裡より「ア其は感心誠に美しく出來て居る」と御手に取られて宣ひしも最早視線は箱に至らず、離被架を力に横になり痰を出すよと仰せらるゝまゝ膿盤を御口の下へあてがい一時間余を過くるも徒らに呼吸促迫するのみにて喀痰少しも出です、四時頃佐々木教授岡本氏と共に來診あり「先生、佐々木先生か御見にになりました」と申上げゝるも「誰か來ても駄目ぢや」と仰せられ佐々木教授には診察なく容態に付獨逸語にて二ッ三ッ御話あり、次第に迫る呼吸脈搏に岡本氏餘り苦しい樣なれは注射を致しましようかと申されけるに「そうですな隨分苦しいですな」と仰せられ莫比とカンフル各一筒宛上膊に注かれける、今はハヤ恩師の御一生も次第に臨終に迫る御容子、不取敢結城及東京へ打電し學校病院並に八田氏へ電話にて危篤を報じ越野氏の許へは急使を走らしぬ

三十分ばかりを經て岡本氏樂ですかと問ひ給ふに少しも苦痛なきも只出つるもの出てさるは殘念たと答へられ、五時十分鷲山氏を先きに十分を經て岩佐、鷹見の両氏驅附く恩師「難有う」との御挨拶あり、御孃樣れ側へ參られ「嗚呼御父さま」と大聲號泣遊はされけるに、ヨシ〳〵分つたあちらへいつてた休みよ」と常の如く申され、御隱居樣奥樣とも〳〵に交々分りますかと」申さるゝに「確か〳〵」と答へさせ給ひ、又御手を取り永き訣をおしませ給ふ御隱居樣に向はせられ「御母樣の御手は大變熱つい何處かお惡るくはありませぬか」と案じさせられ「ドコも惡るくはないから心配しないでいーよ」と申さるゝに「ろれならは安心だ」と宣ひぬ、ろの終始諭らせ給はさる日頃の御孝心のほとも偲はれて並み居る者袖絞らぬはなかりき

轍の音にソレ八田先生ぢやと看護婦の申す毎に御目を開けさせ給ふも其然らさるに及ふやいたく失望の色あり、五時五十分八田氏漸く驅附く、八田さんがと御隱居樣の耳近く申さるゝにつれ待ちしとばかりジッと視線を向けられ御會釋あり、八田氏「先生」とばかり力こめて申上けたるに促迫せる御苦しき呼吸の間より「君が……」稍暫くして「絕ゑず……」の語を發し給ひ、尙何か云ひ續けんと唇の邊を動かし給ふも御苦痛甚しきにや御隱居樣始め人々近寄りて耳を傾け聲を潛めたるも聞き奉らんに由なかりしこそ返へす〳〵も遺憾なれ

岡本氏、鷲山氏二階より下りたち御病床の右には上より八田、岡本、鷲山の三氏右には御隱居樣、奥樣、御孃樣並に看護婦宮本、田宮侍し奉り兩側に垂れ給ふ御手は左御隱居樣、奥樣右岡本、八田の兩氏にて取り奉り脉搏を檢す、其內刻一刻御臨終はさしせまりぬ目は半ば閉ち給ふも眼球上竄し蓬々たる御髮の間よりは稍口を開かせ給ふも血色とては露ほども見奉らず、薄暗き電燈の影蒼白いよ〳〵死の色を浮べ給ふにつれ御病床に集ふ御家族門生看護婦の噓唏流涕とゝめも合へず、而して臨終に先だつ五分看護婦の御苦しくはありませぬかと尋ね參らせたるに「全く苦痛なし」と明かに答ひさせ給ひたるゞ恩師か最後の御詞なる

生者必滅會者定離、さるにても之が此世に於ける親子夫婦師弟の永久の別れなるか、老いて我子に先立たれ給ふ御隱居樣の御胸のうち、いたいけ盛りの御令孃御令息を擁して遺り給ふ奥樣の御心中、さては終生の恩師として賴みつる我等門生か悲嘆、願くは御快復あれかしと日夜看侍し奉りし看護婦が落膽、今はの塲合せめてもの心盡しに綿に水を含めて泣く〳〵御唇を濕めし奉

る哀れさ悲しさよ

一同御臨終のほどを守りつるほどに御呼吸安靜とならせ給ひ今の今まで聞き奉るも涙の種子なりし御胸につまりし痰のズー〳〵響く音も打絶にてスヤ〳〵と安らかになり給ふに從ひ、欠滯せる細小なる脈搏は打つか打たぬに變り果て間もなく脈搏全く打絶にて心動亦止むに及ひ靜に深き吸息を數秒の間を隔てゝ二回爲し給ふ、時正ま六時廿分、――嗚呼〳〵之ぞ恩師最後の呼吸なる!!!嗚呼〳〵之ぞ恩師最後の呼吸なる!!!

○葬儀略記

恩師長へに逝き給へり呼べども叫へとも亦歸らさるの人となり給へり、今われ一芥の身、つたなき筆把りて葬儀前後の模樣など書き綴らんとするも書々眞に夢に夢見る心地して又當時を追懷するに忍ひさるものあり、顧れは當時我は何を爲すべく又何を爲しつゝ其日〳〵を送りしか、げにわれはたのが日記さへも綴るを忘れ果てたりき、匆忙之裡われ我を忘れて我か爲せしことさへ覺になき身のなどで他に及ふの餘力あらんや、殊に當時斯くもつたなき筆把りて恩師の德を傷け奉るの餘儀なきに至らんとは露思はさりし事とて何等深き意を拂ふことも得せで打過きつるころ返へす〳〵もわか身の過なれ

されど恩師や夙に天地を以て棺槨と爲し日月を連璧と爲し星辰を珠璣と爲し萬物を齎送と爲

すの人なれば、わが果敢なくも書き綴るを見給ひてさぞやさぞ苦笑や重ね給ふらん、思へは罪深き業にころ

さても恩師最後の呼吸をなし給ふや豫てかくあるべしとは期しつゝも今更の如く驚きと悲しみとの爲に打集へる者われ知らずワッとばかりに泣き伏しぬ、廿分ばかりを經て越野氏息を切らして駈付けしも時すでに遲く、嗚呼……とばかり、千秋の恨事面にあらはれてかなしとも悲し

御母堂の意向により寺は六斗林玉泉寺と定まりぬ、直に人を走らせたるも折惡しく和尚他行中にて然るへき寺院を世話せんとて蛤坂妙慶寺を指定し來りぬ

一時間余を過き村上、宮田、石川の三先生危篤と聞き參りしとて來ませり、之と前後して佐々木先生、少しほど經て高安先生見に給ふ

われ等は不取敢通知先など初は年賀狀により次て恩師か古き日記の端に伊呂波順にて記るし給へる芳名錄によりソコハカとなく調べそめぬ、佐々木先生には此頃不意に一族、友人に不幸あり親しく之に携はれりとて葬儀に就て細大漏さず何くれとなく指導せられ又自ら立つて世話し給へるは何事もウブなる遺族門人に取りて此上なき幸なりき

讀經の聲あはれに鉦の音一ぎわ寂さをましぬ、白衣にて蔽はれ給へる恩師か影殊の外打萎れ布團の底に僅に渦高き思のするぞいよ〳〵悲しく、通夜せる人々の首うなたれて面のあたり冷かに眠り給ふ故人を偲ひて默念われ知らす太息をつくぞ又なく哀れなる

曉の空、くだかけの音もそゞろに響く頃泣く〳〵「むくろ」を柩に納め奉りぬ、感慨いとゝ深きものあり

發喪の事に就き專門學校長より特旨叙位の奏請あり一時見合はされ度しとの申込に從ひ遂に翌十七日正午を以て之を發表せり、叙位の手續、時の都合により齟齬せしやにて其御沙汰を得さりしは聞く者殊の外いたましう思はぬはなかりき

十七日午後より夜にかけ諸方へ通知狀を發し、翌十八日初めて北國、北陸兩新聞に死亡廣告を載す、世人か驚きと悲しみやいかゝなりしならん、訪ふもの悔むもの踵を接し人の聲轍の響いと力なく、晝夜一几の卓を前に受附の職を勤め給へる校院各位か勞眞に察すへきなり

入るもの出つるもの上を下への混雜、幸に學校病院各位か夜を日につぎての斡旋盡力により署各部署は定まりぬ、葬儀、通知、接待の各係員額を鳩めて細則を定め遺を拾ひて餘す處なく一から十まで十より百まで何事も萬事滯りなく整へて又缺くる處なし

葬儀係の務や事最も繁けくして責最も重し、係員各位か多忙を極め努力夜を徹するものありしは佐々木係長か寢食を忘れての勞苦と共に只感泣の外なきなり、殊に村上、宮田、石川の諸先生親しく通夜し給ひ金子先生徹宵棺側に侍し給ひしは情誼のほども偲はれていとゆかしきものあり

十九日は來りぬ、朝來蒸籠、供花、花籠、放鳥、諸方より手向けられぬ、吊電、吊狀入り代り立ち代り配達せられ各係員か繁劇目も眩まんばかり、午下一時過くる頃より會葬者西より東よりし和裝あり

洋裝あり、肩摩轂擊又立錐の餘地なし

一時半久しく恩師か臥し給へし室内に靈柩を前に出棺の讀經あり、二時靈柩正に門を出つ、折からの雨收まりて人半ば傘を閉づ、喪主、未亡人始め一族門生悄然として之に從ひ多くの會葬者肅然として堵を列ぬるか如し、前列漸く動き初むるや列は正に

花車……放鳥　花籠……高張々……造花……盛菓子　迎僧○○
花籠……高張々……造花……盛菓子　迎僧○○……導師○　四角香堂……勳章台……
……位牌堂……勳章臺……銘旗　燈籠　燈籠……天蓋　柩……喪主……遺族……親戚……挾箱……會葬者……學生行列

の順序を以て靜々と進み出てぬ、棺側には右に八田、越野左に飯塚關素服にて從ひ奉り喪主勝利（附添岡本）、未亡人鉄侍子、令孃加女子、令息勝光之に次き各敎授職員知友知己等一般會葬者相次き學生隊最も殿をなして、順路長町一番丁を左り河岸に沿ふて下り右衛門橋を右に渡りて右折石浦町に出て本通を香林坊、片町、さては犀川大橋を打越して蛤坂を上り二時四十分妙慶寺に到る、沿道垣を爲すの人恩師か溫容と德望とを追惜して悲哀の聲を發せさるはなし

靈柩山門を入る、直に擔任葬儀委員か指揮の下に諸般の設備整へる本堂正面の祭壇に東面して靈柩を安置し壇上「義山院殿禮譽勝陳居士」の靈牌を建つ、堂内左側には一般會葬者右側には遺族、門生、校院敎職員、婦人着席し、軈がて梵鐘の合圖にて導師仝寺住職大村心定師左右導師外十八沙門を隨へ式場に參着す、一座寂々として聲なく再會長へに期し難きを悲しみ暗涙を浮へて哀悼

の意を表せさるはなし、四奉請、廣懺悔、諸尊回向、讃鉢、の後右導師靈前に進み出て、献湯の式を行ひ「洗心甘露水、悅日妙華雲」の辭を捧け左導師仝しく献茶の式を行ひ「八功德水湛然盈滿、清淨香味如甘露」の辭を捧け更に大村導師献香の式を行ひ恭しく下炬を垂示し畢て一偈を呈す、辭に曰く

秋氣冷々風退潮　遊人吟盡催歸橈
碧巖鳥落暮天日　迷悟絕行大道寥

次て十念授與、護念經を誦し回向文を誦す、是に於て喪主、未亡人、令孃、令息、中澤清八、高安右人、佐々木逵、飯塚忠男、關格之助、岡本京太郎、八田智証、越野義三郎、鷲山謙吉、岡田剛吉、木下克雄の順序を以て燒香し奉り、引聲念佛一會の後更に學校總代高安右人、日本赤十字社代理佐々木逵、村上縣知事代理藤波公壽、學生總代松村喜一、門生總代八田智証、吊電披露鷲山謙吉の順を以て各吊辭を朗讀す

吊辭

嗚呼敎授小川勝陳君逝ケリ君ノ吾校ニ在ル啻ニ半歲朞年ノミナラス裘葛更ルコト實ニ十有四回ニ及ヘリ吾校ノ歷史其ノ三分ノ二ハ君ト共ニ進メリト云フヘシ君資性温厚擧止端嚴學フニ篤ク敎フルニ功高ク時流ヲ超越シ遠ク名利ノ念ヲ距ル眞ニ士風アリ人皆以テ推ス春秋尙盛ニシテ今ヤ乃チ亡シ豈ニ痛惜ノ至リナラスヤ曩ニ君ノ病久シキニ彌ルヤ吾儕其ノ或ハ再ヒ起タサルヲ思ヒ吾校ノタメニ一良敎授ヲ失ハンコトノ萬一ヲ憂ヘタリキ今遂ニ幽明長

別ス多少ノ期スルトコロナキニ非サリシモ聊カ遽色ナキヲ得ス公私両端ヨリ萬感交々胸中ニ往來スルモノアリ死生ハ天ナリト雖モ故ラニ哀悼ノ情ニ堪ヘス況ンヤ遺族各位ノ衷心察スルニ餘アリ復タ何ヲカ言ハン職員一同ニ代リテ謹テ吊意ヲ表ス

明治四十一年九月十九日

金澤醫學專門學校長醫學博士　高安右人　敬白

本社石川支部特別社員從五位勳六等小川勝陳君遠逝セラル

君ハ石川支部看護婦養成所教員トシテ多年教育ニ力ヲ致サレ又篤志看護婦人會石川支會講師トシテ斯會ノ爲メ盡瘁セラレタルノ功績ハ決シテ尠少ナラストス

今ヤ其訃音ニ接シ誠ニ痛惜ノ至リニ堪ヘス仍テ社員百四十余万人ニ代リ恭シク吊詞ヲ呈ス

明治四十一年九月十九日

日本赤十字社長　侯爵　松方正義

爰ニ社員小川勝陳氏ノ遠逝ヲ聞キ哀悼ノ情ニ堪ヘス依テ支部社員ヲ代表シテ吊詞ヲ呈ス

明治四十一年九月十九日

日本赤十字社石川支部長　村上義雄

吊辭

我カ敬慕スル
恩師小川教授ハ不幸二豎ノ襲フ所トナリ遂ニ簀ヲ易ヘラル痛惜何物カ之ニ加ヘン
先生夙ニ業ヲ大學ニ卒ヘ爾來本校ニ教鞭ヲ執ラル、事十數年學德兼備諄々トシテ倦マス今ヤ先生ノ薫陶ヲ亨ケ社會ノ活舞臺ニ立ツモノ幾百ヲ以テ數フ其ノ効績ヤ實ニ偉大ナリト謂ツ可シ先生資性高潔ニシテ頗ル聖人君子ノ風アリ洵ニ後進ノ師表トシテ衆庶ノ敬重ヲ博セラル惜哉先生未タ春秋ニ富ミ前途有爲ノ身ヲ以テ遠ク幽明界ヲ隔テラレ又温容ニ接スルノ機ヲ得ス噫悲風園庭ヲ拂フテ美華ヲ損シ慘雲九天ヲ罩メ皎月光ヲ失フ嗚咽涙ヲ灑イテ仰天俯地スト雖モ怨恨猶支ヘ難キヲ奈何ニセン只倍々拮据奮勵シテ本分ヲ完ウシ以テ其ノ鴻恩ノ萬分ノ一ニ酬ユヘキアルヲ知ルノミ茲ニ謹テ在學生一同ヲ代表シ滿腔ノ赤誠ヲ捧ケテ恭シク哀悼ノ辭ヲ奉ル

明治四十一年九月十九日

金澤醫學專門學校生徒總代　松村喜一

吊辭

恩師小川先生ハ逝キ給ヒヌ嗟恩師先生ハ隱レサセ給ヒヌ恩師カ尊キ温容ハ又拜スヘカラサルカ恩師カ瑩ノ如キ恩情ハ又受クル能ハサルカ而シテ恩師カ諄々トシテ倦ミ給ハサル慈愛

深キ教訓ハ遂ニ又聽クヲ得サルカ

恩師ヤ名門ノ出生レナカラニシテ祖先ノ遺風ヲ繼キ温良恭儉讓、常ニ沈厚正直ヲ以テ事ニ當リ誠心誠意人ノ肺腑ニ徹シ給ヘリ其情誼ニ厚キ師弟ノ間豈骨肉ノミナランヤ洵ニ親子ダモ及バサルモノアリキ從テ輓近世道人心ノ衰頽ニ流レ師弟ノ情誼陵夷セル間ニ在ツテ亭々トシテ其德望ノ高キ深遠ナル學識ト相俟テ人ヲシテ日夜瞻仰景慕措ク能ハサルモノアリキ實ニヤ學德兼備トハ蓋シ恩師先生ノ謂ナルカ

恩師ノ育英ニ從ヒ給フ既ニ十有五年其功ヤ其勞ヤ雙ヒ罕ナル學德ト共ニ更ニ呶々ヲ要セサル所思フニ今日醫學ニ仁術ニ一家ヲ爲セル者一以テ何ソ限ランサレド恩師カ如ク學東西ヲ兼チ識古今ニ通シ德一世ヲ覆フ者果シテ幾人カアル

早月七日恩師疾アリ病床仰臥茲ニ一百卅有三日病勢ノ致ス處多少ノ消長アリ激シテ熱トナリ痰トナリ羸瘦日ニ增シ疲憊月ニ加ハリ時ニ褥瘡ヲ生ス形容枯骨燋悴ノ狀宛トシテ寒山枯木ノ態アリ而モ恩師ノ之ニ處スル頗ル平靜些ノ煩悶ナク些ノ懊惱ナク臨終ニ先ツ幾分尙苦痛全ク無キヲ明確ニ應ヘラル恩師カ夙ニ修養シ給ヘル不動ノ精神今ヤ死生ノ境ニ在リテ超然自若トシテ此ノ如キモノアリ先キニ六月七日自ラ口ヅサミ給フテ曰ク

かくなりて待たるゝものは明烏

越テ二日

罪深き者と思へば中々に

かゝるなやみのいとゞかるけれ

苦しみをかへて樂しむすべをさへ

覺ゆつる身のありかたきかな

ト詠マセ給フ以テ恩師先生カ大覺ノ機微ヲ窺フヘク以テ其高風ヲ追懷欽仰スヘシ

サハレ秋風恨多ク白露涙滋クシテ物思フ心ノ千々ニ亂ルヽハ是レ人生ノ常、恩師カ靈骸ハ今正ニ目前ニ冷カニ眠リ給フモ一タヒ北邙一片ノ煙トナリ給ハヾナツカシク慕ハシキ御影ハ最早尋ヌベクモアラサラン膝下ニ面謁シテ親シク其風貌ニ接シ敎訓ヲ辱フシテ親シク其温情ニ浴スル能ハサルハ千秋ノ恨事トスル所永別ニ臨ミテ我等門生カ愁腸ノ念哀切ノ情縷々トシテ糸ノ如ク盡キサルコト亦香煙長ヘニ立チ迷フカ如シ悲矣

時正ニ仲秋天地漂渺トシテ仰ケハ秋風颯々恩師カ遺德ヲ傳ヘ伏シテ回レハ清流淙々トシテ餘音ヲ傳フ恩師カ遺德以テ百代ニ垂レ恩師カ餘風以テ萬世ニ垂ルヘシ先生尙クハ髣髴トシテ來リ饗ケヨ

明治四十一年九月十九日　　門生總代　八田智証　再拜

（吊電吊狀省畧）

其調或は莊重或は悲哀滿堂肅然たり、次て參拜者隨意禮拜燒香を爲し、總回向文、退讃鉢にて式全

く了を告く

それより靈柩は再ひ遺族門生校院敎職員學生並に有志の會葬者に護せられて蛤坂横町を野町二丁目に出て本通を南行泉新町を右に泉火葬場に着し、向て右なる正面特等第一號の石竈に納め奉る、闇溟風死して鬼哭啾々醒氣身に逼る處方正に一間に充たず、覺ゑず涙のもれ出つるものあり、嗟悲哉

此日朝來晴りわたりたるも正午頃より俄に雲動きて雨となる而も二時靈柩の門を出つると共に收まり、泉火葬場を一同退散、人各家に着きし頃再ひ降雨沛然たるものあり、嗚呼恩師か誠德天亦之を悲むに似たり

而して會葬者の主なるは本多男爵、小泉旅團長、今井、中野、河合、三竹、市村、宮川、八波の四高敎授並にスタイヲル、ウォルフォート兩氏、尾上警視、本多政由、清水杢平、杉中利平次、久保田全、歸山蘭太郎諸氏市内開業醫山田謙治氏始め軍醫、敎育家、實業家等、校院敎職員、學生を合して實に數町の長きに及べり

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝六時御隱居樣始め御遺族一同納骨の爲に火葬場に赴かる、岡本飯塚關八田之に從ひ中澤主人福田翁亦仝伴す

……あはれ一夜の煙、俤止む白骨の幾むれ……憶

○恩師之性行

恩師は一言にして之を云へは至誠之人也信義之人也實大之人也、夙に養ひ給へる和魂漢才洋識を以て公に私に盡くされたる功勞と上下に於て隱然重きをなされたる德望とは今爰に縷說するまでもなかるへし、心事の高潔にして器局の寬宏なる之を仰けは彌々高く性情の眞摯にして篤行に敦き之を鑽れは彌々堅き思あり、擧止溫雅にして和風藹々たりと雖絕にて文弱の痕なく風貌れたのづから犯すへからさる威嚴を備へ給ひ親むべくして狎るべからす近づくへくして亂るへからす、大和心の旭に匂へる櫻の面影ありて宛然古武士の英姿ほの見にてゆかしともゆかしきものあり、常に道を以て已を修め禮を以て人に接し起居寢食苟くもし給はず、事に臨みて悠々逼らす曾て疾言遽色なく神色自若として綽々餘裕の測るへからさるものありしは益其器の大なりしを窺ふべく其終始一貫明德に順ひ至善に止まり給ひしは內養ふ處頗る深かりしを想ふへし、殊に世の所謂學究的偏見なく曲學阿世的陋習なく虛榮に狂はす聞達を求めす利慾に趁らす邊幅を修めす廉潔自ら已を持し謙讓自ら已を卑ふし悠々自適し給へしは古聖人といへとも以て加ふる處なきなり、而して其氣品高く人格貴く心境の澄淸、明鏡止水に比すへく又光風霽月の狀あるに加へ學和漢洋に精しく識古今に通し給ひしは當代罕に見る處且つ其諄々として敎へて倦まず人をして徹底會得せざれは止み給はさるものありしは、敎化の爲に明德を奉して天特に此人を世に降し給ひしか如く生れなからにして世の準繩となり人の師表たる特性を

稟け給へりと謂ふべし

世には社會の木鐸として且つは風敎の維持者として自ら敎育家の班に列なり育英の重任を擔ふ者、時に假面を被り時好に媚ひ或は醜聲を漏らし或は惡聞を放ち時として表裏二面の遣分けをなし恬然省みる處なきものあり、然れども恩師や其間に伍して何等の俗的趣味なく方正謹嚴時流を追はす風潮に阿らす曾て非禮の地を踏ます曾て非禮の聲を聞き給はさりき、又世には自ら其說を二三にし其責任を免れ或は人を賣るものあり其無節操無定見笑ふべく、或は徒らに八方に顧嚬し巧言令色至らさるなく變言反復恒なきものあり其老獪其陰險まことに驚嘆するに餘りあり、此等は凛乎犯すべからさる氣節と高潔なる品性とか如何に士に尙ふへきものなるかを知らさるの徒なり、然れとも恩師にはかゝるいまわしき事露ほどもあらさりき、恩師や自ら其言を重んじ自ら其責を負ひ深く信して疑はす毅然として世に衒はす人に諂はす知られさるも慍らす至誠至行天を怨めす人を尤めす常に至公の心を以て至平の事を行ひ之を貫くに淸高の眞趣を以て事に當り世に處し以て其大節を全ふし給へり、語に云く小隱々陵藪大隱々朝市と、於戲恩師や正に市朝の大隱なりき

恩師は頭腦頗る明晰、卓識群を拔き夙に先見の明あり、事を爲す深思自ら導き熟慮其本相を究め老察至らさるなく周密及はさるなし、從て其間條理整ひ規矩明かならされは自ら之を決し自ら意を安んじ給はす、其人を敬重し給ふや上下貴賤を問はす老幼男女を論せす、子弟の如き寧ろ仝僚の欵を垂れ給へり、又人に臨むや常に之に忍ひさるの心を以て臨み給ひしか故に人亦先生に

背くに忍ひさるの情ありき、而して人の事に當りて意見を求め教を乞ふものある必すしも直に之か快刀乱麻的意見を附せす一見恰も要領を得さるか如き態度なきにあらさりしも是れ蓋し一般普通の人として常識を有し判斷力を具ふる者焉んぞ自ら覺り自ら辨へさることのあるへき能く思を致し其本善に歸り良心に省みて親しく惟みる處あらばなどか本來の面目を發揮して覺らましかはとの誠心誠衷より出てしものにして人の心を束縛せす之が自由を損ねすあくまでも人の心を尊重し之が正鴻を得せしめ給ふ趣旨に基きしものなりき、然れとも事苟くも重且つ大なれは赤心を表白し胸憶を披瀝して意見を詳述し時に涙を漂へて其眞情を吐露し人をしてまた其處を得せしめ事の理非を誤まらしめ給はさりき

我等は屢次説を爲し言を立て事を早急に成さんと欲するの僻あり、恩師毎に之を戒めて曰く書生の空論は十年にして成る我か從來の言動殊に其感深し、言ふ處是にして事正しけれは何時かは事の成らさらん時利あらすしておのが欲する處おのか思ふ處成らさるも一朝時到り人悟らば事則ち成らん、成らは則ち時に長短遲速の差こそあれこゝに其宿志達し其希望充されたるもの又何そ聲を大にし色を變へて爭ふの要あらんや云々と慰憮交々至らさる處なかりき

其辨舌の如きも能辨又は雄辨と云ふよりも寧ろ一種擬すへからさる達辨を有し給ひ、其教場にあると演壇に立ち給ふことを問はす滿堂肅として聲なくおのづから襟を正しうせさる者なく一言隻句と雖駄辨弄辭なく時に警句口を衝て出て時に諧謔人の意表に出て覺にす時の移るを知らす油然として人皆心胸を一掃せられたる心地せさる者あらさりき

恩師か家庭や常に洋々春の如くなりき老親に至孝にして偏に其至らす及はさらんことを憂へ給ひ父母の命唯々諾々未た曾て一度も違ふ處なく、伉儷相和し、慈愛兒に溢れ偶疾なれば徹宵之を看護し寢に就かさること屢なりき、家に在る團欒卓に就きかつて食を撰ひ給ひしことなく酒類の如き公會の席上などにて止むなく杯を手にし給ふ外殆んと全く自ら求めて之を取り給はす茶は殊の外好み給ひしも毫も喫咽し給はす、又頗る仁恕の心に富み給ひ下婢雇女の末に至るまで憐愍を加ふる人の及はさるものありき

恩師には道樂なし、若しありとすれば天性文學的趣味に富み羅甸獨語の如き外人をして尙斯の如き人あるかと嘆稱措かさらしめ、深く漢籍に通し國文に達し興に乘じて閑餘雅懷をやる時に詩賦あり時に俳句あり時に歌詠あり時に狂句あり、又手蹟は頗る目毎にして今の世に珍らしき能書筆力の遒勁流暢なる墨痕紙上に躍り轉た其人を想はしむ、而も猥りに之を表はし給ふことなく人の如何に之を乞ひ之を求むるも決して其需に應し給ひしことなかりき、孔夫子曰く「弟子入りては則ち孝、出て丶は則ち弟、謹みて而も信あり汎く衆を愛して仁に親づく行ふて餘力あらは則ち以て文を學はん」と此言實に恩師か全面を表はして餘蘊なしと謂ふへし

もし人あり恩師を非議し恩師を云爲するものあらはそは恩師か全面を識らさるの人なり、單に其一面を見て全豹を知らす其一側を窺ふて未た他方を知らす或は其皮相を見て其眞相を識らす其外表を見て其眞髓眞骨頭を看取するの明なき人未た以て共に語るに足らさるなり、恩師は廬山の如し廬山の眞面目や其一嶺を望み其半峯を見るも得て知る處にあらさるなり、さりなか

ら蘇軾か所謂「横看成嶺側成峯遠近高低各不同不識廬山眞面目只緣身在此山中」の語亦以て我等門下生が謂ならすとせすと云ふ者あらば乞ふ謹んで之を聽かん

今我等門生の身として恩師を議し之を叙するは禮に於て大に欽くる處甚た重し只敢て冒瀆の罪を擔ふ所以のもの聊か恩師か爲人の一面を傳ふるの止むを得さるに出つ、其逸話の如き其遺聞の如き恩師か知己先輩仝僚の士にして之を爲すまた多かるへきを信す

而して恩師か資性と德行とは素と其父祖に出てたるものにして恩師か半面を識らんと欲せは夙に至孝至親孝養怠り給はさりしそが嚴君の爲人を知らさるへからす、嚴君や顯るゝ處和にして慈且つ廉なるの一面に過きさりしも而も內養ふ處武にして剛且つ俠なりき、加ふるに文藝に精通して殆んと達せさるものなく、恩師か嚴君の德風に私淑し其遺風を繼紹し幼にしてすでに其聖德を備へ給ひしもの全く嚴君か衣鉢を傳へたるものと謂ふべし、されば今恩師か親しく手記し給ひたる「珠壽之命畧歷」より其「姓名字號」と「見聞餘錄」とを採錄して以て遙に恩師か餘香と嚴君か德風とを偲はんかな

遠祖重房住尾州智多郡芙比郷小河始稱小河(三郎)ニ因ミテ付ケタリ元小河又緒河ト書シタリ

通稱

○○ハ自ラ選ム所ト聞ク　、、ハ桑田本左衛門氏ノ命名スル所ト聞ク

○小川鈴之　安政己未六月　小鏡帳ニ　小河珠壽之(能登スヾ郡)○之トアリ　一字不明

名乘　勝廉

幼名　程之助　文政五壬午八月九日小塲兵馬利、尚、氏命名

改稱　程吉　文政八乙酉公、儀、御差合アラセラレ候ニ付殿、樣、ヨリ御○○進候　彌生十九日」ト書付アリ　二字不明

字　古矜　印章ヨリ推考スル處　論語陽貨古之矜也廉今之矜也忿戾」　矜。持、守、太、嚴、廉。稜、角、隋、厲、以上亡父手記中ニアリ

號　溪齋　考勝愛桃。溪。ト號スルヨリ出ツト聞ク

桃翁　同上ノ理由(一時俗稱ニ應用セシヿアリ)。俳事ニハ桃青翁ノ名ニ疑似スルヲ以テ避ケタリ。明、治、二、年、十、二、月、十、日、ノ日記ニ――ト改ムルヿトアリ

龜廼屋　和歌ナドノ時ニ用ヰタリ

俳名　白船樓杉臺　白眼臺杉雨師ノ命名ト云フ　弘、化、五、戊、申、五、月、四、日、入門同月九日改號紫。雲。樓。杉臺

芋翁、芋。魁、芋。山人、芋。居。士。　元、治、二、乙、丑、四、月、廿、四、日、○○　○○○ノ號ヲツケル事」ト筆まかせニアリ

狂哥　一亭呑月

泰山　匿名杯ニ用ヒタリコレ杉臺ノ倒音ナリト

○見聞餘錄

○幼ニシテ既ニ學ヲ好ミ甫メテ五歲俳句ヲ誦ス又七八歲ノ頃碁戲ニ耽リタレモ後全ク廢絕シ不肖及ヒ門人等ニモ勤學ニ害アリトテ禁シタリ○十五六才(天性虛弱ナリシナラン)ノ交ヨリ殊ニ脆弱ナリシトノヿニテ藥用殆ト十數年虛日ナシ故ヲ以テ自養心養体ノ道ヲ悟リ晩年養生新論抔ヲ書スルニ至ル每ニ言フ養生ノ實行ニ於テハ醫師ニ讓ラス云々○在國ノ片ハ文事ヲ桑田本左衛門猿瀨豐城等ニ問ヒ武藝ヲ須藤軍太夫(免許ト傳流劍術)高橋源左衛門(馬術)ニ學ブ○廿二才上府後ハ文事ヲ室直淸……等ニ問ヒ又三十二才ノ片聖堂ニモ出入セリト云(此時加々爪氏ニ養ハレタルノ當時ッブサニ辛苦ヲ嘗メ言語ニ絕スルノ事アリト云。シカシ室先生其好學ニメデヽ大ニ優遇シタリト聞ク)詩ヲ大沼枕山等ニ學ビ俳諧ヲ廿七才入門白眼臺杉雨ニ學ブ、茶事ヲ藤山(殊ニ親交シテ七年ノ友タリシト云)藤兵衛ニ學ブ○武藝ヲ後藤淸兵衛(澁川流)寺山源六郎(弓術)ニ學ブ書ヲ平林淳德ニ學ブ(鐵之丞兄君亡父ニ平林ヲ止メテ米庵ニセヨト言アリシニ亡父對テ云豪全院樣平林ヲヤレト被仰(小野田秀庵氏之話)故不改ト○又閑餘橫笛太鼓抔ヲ學ビタリト云○戊辰事件前後ノヿニ就テハ不肖不敢贅然シ亡父常ニ當時ヲ追想シテ所思ノ十分一モ貫徹セザリシヲ歎キ居レリ、維新後優命屢下リタレモ固辭再四明治二三年頃ニ至リテ四方ヲ遍遊スルノ志ヲ發シ既ニ「淸遊錄」ト題シ其準備ニカヽリタルニ有故不果ハ遺憾ナリシト每ニ申サレタリ

別記ノ如ク廿二才初メテ上府後ヨリ沒スル歳ニ至ル迄見聞スル所ヲ筆記シアリ積ンテ數十冊ニ及ブ上ハ王侯士人ノ言ヨリ下ハ田夫野人ノ片言隻語迄モ苟モ採ルヘキ点アルモノハ悉ク収ムト云流義ナリ殊ニ戊辰當時ノ日記ハ公私共ニ些事ニ至ル迄記シアリ大ニ後日ノ參考トナルヘキモノモアラント推察セラル其間詩俳ヲ狹ミ又旅亭、腰掛茶屋等ノ書畫抔ノ模寫アリ忙中有閑ト言フヘキカ

○戊辰三月廿五日不意打ノ節拂曉雨戸ニ砲丸雨ノ如ク來リタルヰ侍人急遽衣ヲ薦メタルニ先ツ例ノ如ク掃一掃シテ着タルニハ後人其潔癖ヲ笑ヒタリ云々○其日騎シテ過グル處ヲ狙擊サレタルニ砲丸杉枝ヲ折リテ身ニ中ラス幸運ノ人ト其狙擊シタルモノ申シタリ云々○後數人ト利根川ヲ下リ上京シタルヰ船中閑アラハ不絶居眠ヲナシテ光岡氏ニシカラレタルヿアリ抔不肖耳底ニ存セリ

○秉彝館廢止後徒ヲ集メテ敎ヘタルヿアリ次ニ小學ニ從事シ後祠官ヲ拜シ敎導職ニ補セラル老年ニ及ビタレモ風雨ノ別ナク殆ド身ヲ終ル迄日拜ヲ遂ケタリ唯敎導ノ職名アリテ其實ヲ盡サヽルニハ慚愧ノ至リト毎ニ語リ辭表ヲ出シタルヿアリ

○學風ハ一方ニ偏セサルヲ好ミ始メ儒ヨリシテ入リ間々佛道ヲモ嘗メ終ニ神道ヲ究メタレモ常ニ偏セサルヲ貴ヒ耶蘇敎ノ說道如何ヲ知ラント其書ヲ讀ミ宣敎師ノ演說抔ヲ聽聞シタルヿ屢アリ

○晩年易ヲ好ミ大ニ自得スル所アリ又畫ヲ習ヒ沒前二ケ月出京ノ際モ尙粉本ヲ蒐集シタ

リ○此両三年前ヨリ好ンテ大道叢誌ヲ讀ミ自ラ其本社ニモ之キ爾後上京ノキハ少壯ト伍シテ同ク入學シ生徒トナリテ學ハン可ナラン歟抔イハレタリ

○沒前十二日(即チ明治廿五年十二月廿八日)不肖賜暇京ヨリ還ル例ニ依テ快談刻ノ移ルヲ知ラス一日ヲ隔テヽ出町常ノ如ク歸家後少ク風邪ノ氣味アリ廿六年一月一日鄕社參賀式アリ例ノ如ク自ラ式場ニ臨ントシタルヲ母不肖ト共ニ其疾ノ增惡センヲ慮リ再三止メテ始メテ留リタリ明治八年祠官ヲ拜シテヨリ十九年未タ勤メヲ欠カス只此年ノミ欠勤ス亦天ナル哉

○三日入浴大ニ爽快ヲ覺ユト言ヒ筆ヲ援リテ水戸義公梅花詩ヲ寫シ翌四日五日ノ頃所謂三節ヲ書シテ示サル

祭巳歳旦　初帚心のちりを掃てから

開く時はや二日なり初暦

年くれぬ酒飲み飯を咋ひなから

六日疾少〻革七日益篤シ八日朝遂不起

○天性至孝トヤ言フヘキ。生母杉人ニ對スルヤ不肖實ニ「孝行」トイヘル事ヲ耳ヨリ聽カスシテ子供ナカラ目ニ視テ眞ニ心底ニ銘シタリ

○不肖殆ント亡父ノ怒色ヲ見タルヿナシ、シカシ自ラ畏敬ノ念ヲ生ス○亡父自ヲモ言ヘリキ自分ノ一生中厲聲激言シタルハ戊辰ノ節上總表ニ出テ勝進公ニ謁シタルキノミナリト

○清貧家ニ餘財ナシ不肖修業ノ爲メニ上京セントスルヤ當時所賜ノ金祿公債ヲ賣却シ全クコレヲ修學ノ資本トナシ亡父母ト自ラ其衣食迄ヲモ節シ不肖ヲシテ後顧ノ憂ナカラシメタリ不肖當時既ニ茲ニ思到リテ殆ト廢學セント欲スルモノ數次○厓カニ業ヲ卒フルヲ得テ未タ喜眉ヲ見ルニ不及シテ遠逝シタルニハ衷情實ニ筆舌ノ盡クス所ニアラス、然シナカラ亡父ハ其苦ヲ苦トセスシテ其樂ヲ樂ミ所謂樂夫天命復奚疑トイヘル如キ境遇ニテ老來却テ健康ヲ益シ氣力愈昂リ常ニ世變過渡ノ時代ニ生レタルヲ喜ヒ六七十年ニシテ數百年ヲ經歷シタル如キ感アリトテ其少壯老時ノ苦樂忙逸ヲ語ルヿ屢ナリキ

○明治廿四年(沒前三年)ノ春流行感冒ヲ患ヒシヰハ正ニ七十歲ニモアリかた〳〵當時爲メニ生命ヲ危フスルモノ數多ナリケレハ大ニ心勞シタリ不肖私カニ謂ヘラク幸ヒニ醫ヲ學ヒタレバコソ危キ玉ノ緒ヲツナギトメタレト翌廿五年ノ春再ヒ疾ミタルヰハ昨春ヨリハ輕カリシカトツモル高年ナレハ懸念シタリ其年末ニ三タヒ疾ミタルヰハ二度目ヨリ尙輕キト思ヒシニ遂ニ起タズナリキ該時不肖又謂ヘラク醫ヲ學ヒタルモ厓カニ死期ヲ一日前ニ知ルノミ人力遂ニ天命ニ勝ツ能ハサル乎　不肖陳妄記

○家系及經歷

恩師名は勝陳、童名新五郎、東海又は黙玄道人と號し、其久しく味噌藏町に住し給ふや或は未曾藏

生とも書し給へり、本姓は水野氏にして本國は三河なるも下總國結城東館に於て呱々の聲を擧け給ひ、御父君は勝廉(通稱鈴之(スヤシ))と申し藩侯勝進公の令弟にして水野日向守勝愛の男なり

其先は清和天皇に出て、天皇の皇子貞純親王の嫡男六孫王經基七世の孫重房(小河三郎)尾州智多郡(今三河に屬す)英比鄕小河に住し始めて小河と稱す、重房の子重清(小河又三郎又水野又三郎)英比鄕小河より更に春日井郡山田莊水野に移りすなはち水野と稱す、重清十八世の孫水野日向守源勝成元和五年、備後福山城を創築し、勝俊、勝貞、勝種、勝岑を經て隱岐守勝長に至り元祿十六年結城々主となり城址を修め壘壕を築き本丸、本町、東館、西館の四部を分つ、次て勝政、勝庸、勝前、勝起、勝剛、勝愛勝進を經て御父君勝廉公に至り給へり

慶應元乙丑年閏五月十六日結城東館に於て生れ給へる恩師は明治五壬申年九月朔日「以勤王事之故男勝陳別家被台出」の故を以て則ち新に小川家を建て給へり時に年甫めて八歲なり

六歲藩校秉彝館に入り給ふや穎達衆に秀て十五歲上等小學全科卒業常に第一位を下り給はさりき、十六歲東上初て獨逸學を修め翌年東京大學醫學部に入り豫備門を經て廿六歲醫科大學を卒業し醫學士の稱號を得給へり

二十四年一月醫術開業免狀下附第五千百八號なり、十一月大學研究科に入り小兒科學一般を修め翌春助手となり產婦人科に勤めて其奧義を究め、廿七年十月第四高等學校教授に任せられ高官等七等五級俸下賜從七位に叙せらる、而して傍ら石川縣金澤病院婦人科兼小兒科長を囑托せられ、卅年小兒科長の兼任を解き給ふや專ら產婦人科に力を致し、卅四年高等學校醫學部の獨立

して金澤醫學專門學校となるや教職また元の如し、卅六年三月初めて石川縣に於て産婆講習所の創設せらるゝや其所長兼講師となり又産婆試驗委員を兼ね給へり、卅七年六月高等官三等に叙し九月從五位に叙せられ、卅八年十月功勞により赤十字社特別社員に推薦せられ卅九年勳六等瑞寶章を授けらる、而して其病革るや三級俸下賜せられたるも特旨叙位の事は事齟齬の爲に遂に其御沙汰を受くるゑ及はずして止みぬ

恩師には二男一女あり、長女加女子八才、長男勝利五才、次男勝尤（タカ）二才（天長節生）なり、母堂筆子初め鉄子と稱し勝愛公の令弟稲葉勝昌氏の女にして勝廉公とは從兄姉たり、年既に還暦を越に給ひ明治四年恩師か生母宮田氏沒し給ふや翌年小川家の新に立つと共に歸嫁し給へるものなり夫人鉄侍子年尚壯仝しく稲葉氏が出なり

而して恩師か履歴の一般左の如し、只明治卅三年迄のものは其自筆に成り、卅四年以後は越野義三郎、小原芳雄兩氏に其取調を托し茲に補足せしものなるも尚誤脫する處なきやを恐る

原籍	茨城縣結城郡結城町大字結城小字東館五十五番地	族籍	士族
産地	下總國結城郡結城本丸	舊藩名	結城藩
舊氏名	小川新五郎	生年月日	慶應元年乙丑閏五月十六日

年號	月日	任免賞罰事故	官衙
明治三年	正月	舊結城藩秉彝館ニ入リ國學漢學修業	
同六年	一月十八日	舊印旛縣結城郡結城町公立結城小學校ニ入リ小學科修業	
同十年	三月廿九日	下等小學科卒業試驗成績優等ニ付勤善訓蒙一部下賜	茨城縣
同十二年	六月十一日	上等小學科卒業試驗成績優等ニ付國史畧一部下賜	茨城縣
同十年	四月卅日	學業勉勵ノ賞トシテ輿地誌畧一部下賜	茨城縣
同十三年	二月二日	東京府本郷區臺町私立獨逸學校ニ入リ獨逸語學修業	
同十四年	十一月十九日	東京大學醫學部ニ入リ同年十二月二日四等預科乙ニ編入セラル	
同十八年	十一月	東京大學豫備門卒業	
同十八年	十二月	東京大學醫學部ニ入リ醫學科修業	
同廿年	六月	東京本郷元町私立獨逸語學校講師囑托セラル	
同廿三年	十二月十六日	醫科大學醫學科卒業	
同廿四年	一月十六日	醫術開業免狀ヲ受ク（第五千百八號）	
同年	五月十六日	東京芝區伊皿子臺町私立高山齒科醫學院講師囑托セラル	内務省
同年	十一月九日	醫科大學研究科ニ入リ小兒科學一般ヲ研究ス	帝國大學
同廿五年	三月十二日	醫科大學助手ヲ囑托ス（產科婦人科勤務）	

明治廿六年	九月十日	醫科大學助手囑托ヲ解ク	帝國大學
同年	九月十一日	任醫科大學助手、八級俸給與	帝國大學
同年	九月十一日	醫院勤務申付	醫科大學
同廿七年	十月五日	任第四高等學校教授	內閣
同年	十月五日	叙高等官七等	內閣
同年	十月五日	五級俸下賜	文部省
同年	十月十二日	醫學部勤務ヲ命ス	第四高等學校
同年	十一月十九日	石川縣金澤病院婦人科產科長兼小兒科長ヲ囑托ス	石川縣
同年	十一月三十日	叙從七位	宮內省
同廿八年	四月十一日	醫學部物品檢閱委員ヲ命ス	第四高等學校
同年	四月十一日	醫學部婦人科室通常用備品消耗品監守及取扱主任ヲ命ス	第四高等學校
同年	九月廿日	醫學部物品檢閱委員ヲ命ス	第四高等學校
同年	十二月廿四日	爲報酬金六拾圓下賜	石川縣
同廿九年	四月二日	陞叙高等官六等	內閣
同年	五月卅日	叙正七位	宮內省
同年	十月廿二日	日本赤十字社石川支部看護婦養成方ヲ依囑ス	日本赤十字社石川支部長 三間正弘
同年	十二月十九日	爲報酬金四拾五圓下賜	石川縣
同三十年	三月十二日	看護婦生徒養成方講師ヲ囑托ス	日本赤十字社石川支部長 古澤滋
同年	三月三十一日	兼務(小兒科長)囑托ヲ解ク	石川縣
同年	四月	評議員ヲ命ス	第四高等學校
同年	五月廿八日	六級俸下賜	文部省

同年	六月十五日	日本赤十字社戰時準備看護人學術養成中能ク其學業ヲ修了セシメラレタル段感謝ニ堪ヘス仍テ慰勞トシテ金貳拾圓ヲ贈與ス
同年	九月廿日	醫學部第二學科長ヲ命ス
同年	九月廿日	醫學部醫學科第三年級々長ヲ命ス
同年	十一月十二日	元第四高等中學校醫學部卒業生學力檢定委員ヲ命ス
同年	十二月廿五日	報酬金五拾圓下賜
同年	十二月廿五日	慰勞金五拾圓贈與
同卅一年	一月一日	石川縣金澤病院婦人科産科部長ヲ囑托ス
同年	三月廿九日	學術上取調ノ爲メ往復滯在共凡三週間ノ見込ヲ以テ上京ヲ命ス
同年	八月廿四日	陞叙高等官五等
同年	九月十日	醫學部醫學科第三年級々長ヲ命ス
同年	九月卅日	叙從六位
同年	十二月廿二日	報酬金百拾圓下賜
同年	十二月廿五日	慰勞金五十圓贈與
同卅二年	九月	醫學部醫學科第三年級々長ヲ命ス
同年	十二月廿一日	報酬金二百圓下賜
同年	十二月	慰與金五十圓贈與
同卅三年	四月一日	年手當金三百圓下賜
同年	四月四日	御用有之京都大阪二府ヘ出張ヲ命ス
同年	九月一日	五級俸下俸

日本赤十字社石川支部長
從四位勳四等　古澤滋

第四高等學校	
第四高等學校	
第四高等學校	
石川縣	
日本赤十字社石川支部	
石川縣	
内閣	
第四高等學校	
宮内省	
石川縣	
日本赤十字社石川支部	
第四高等學校	
石川縣	
日本赤十字社石川支部	
石川縣	
石川縣	
文部省	

同年	九月	醫學部醫學科第四年級々長ヲ命ス
同年	十二月十五日	職務格別勉勵ニ付爲其賞金參拾參圓下賜
同年	十二月	慰勞金六十圓贈與
同卅四年	三月八日	陞叙高等官四等
同年	四月一日	任金澤醫學專門學校教授
同年	四月十日	本校教則調査委員ヲ命ス
同年	六月十日	叙正六位
同卅五年	四月一日	年手當金四百圓下賜
同年	十二月十八日	特志看護婦人會石川支會講師ヲ囑托ス
同卅六年	二月三日	石川縣金澤病院醫長ヲ囑托ス 年手當金四百圓下賜
同年	三月卅一日	石川縣産婆講習所長兼講師ヲ囑托ス 年手當金百八十圓下賜
同年	四月十六日	學術取調ノ爲大坂府ヘ出張ヲ命ス
同卅七年	一月十五日	本校細則改正調査委員ヲ命ス
同年	二月廿七日	石川縣産婆試驗委員ヲ囑托ス
同年	五月二日	大日本私立衛生會石川縣支會評議員ニ撰任ス
同年	六月廿日	陞叙高等官三等
同年	九月三日	教務課主幹ヲ命ス
同年	九月八日	叙從五位
同卅八年	五月廿九日	産婆看護婦講習所長兼講師ヲ托ス
同年	八月八日	石川縣金澤病院部長ヲ囑托ス 年手當金四百圓給與

第四高等學校
石川縣
日本赤十字社石川支部
内閣
内閣
金澤醫學專門學校
宮内省
石川縣
石川縣
石川縣
金澤醫學專門學校
同
石川縣
大日本私立衛生會
内閣
金澤醫學專門學校
宮内省
大日本私立衛生會石川支會
石川縣

同　年	十月十五日	功勞ニヨリ特別社員ニ推薦ス	日本赤十字社
同卅九年	六月卅日	叙勳六等授瑞寶章	賞勳局
同四十年	十二月十六日	四級俸下賜	文部省
同四十一年	九月十六日	三級俸下賜	文部省

○病床餘瀝

五月五日百福の茶碗(クワワン)碎ければ祝ふ

百福も碎けて終へぬ憐れさよ

れのが齡を君に讓りて

○

八田君に謝す(弯藥とイチゴの實

花も實も心もこもる贈もの

夢に入りてやわれ覺○(一字不明)にけん

○

仰臥三日とカキタルハ三年に對して○○○○○○○○○オシムラクハ好漢句を知らず

(八田?五週云々と再ヒモセリ(以下不明)

昨秋たま〳〵恩師痔瘻の爲め臥し給ふや仰臥三年の著者竹庵居士故近藤常次郎氏を想ふて「仰臥三日竹庵居士を偲ひけり」の句あり、而も三日は十日となり十日は二十日となり三十日となり遂に五週の長きに及ぶやわれ本誌上恩師が動靜を報するに當り仰臥五週と記るせり

茲年再ひ臥し給ふや昨秋を思ふて轉た感懷に堪えす事の序に覺えす仰臥五週と再ひせり、恩師すなはち三日は三年に對して眞情を洩らせるもの豎子其意のある所を知らす惜むべしと叱斥し給ふ教訓のほといと畏し只不明の文字多きは甚た心外に堪えさる處なり

○

池田氏に贈りしを訂正す

馬に騎りし事のなければトアルベシ

右は池田菱吉氏に贈られたる「馬に騎りしことはなけれとクラ(被架)の下に躊躇(セツチウ)まる身ぞ心安けれ」「簑虫の世界をのそく影うらのニユートンの林檎は別に味ある」の一を訂正せられたる者にして、病床に林檎を捧けまつりし仝氏に宛名刺の裏に鉛筆もて認め贈られし歌なり

○

日に惱む體の熱も吾夢も

雨の音にやサメ果てにけん(?)

○

八田君に謝す

涙ある人には涙先きたちて

何を語らん〳〵

恩師が温情津々として盡きざる此句を誦する毎に未だ曾て嗚咽嘘唏流涕せざるはなし

卯月十三日わが辞表は恩師の手より院長の許に呈出せられぬ、夕醫局同人並に田中一次郎林篤絹川友次郎氏等と共にわれ浴槽に在り、使丁中村一封を携へ來り只今小川先生八田サンに之を渡せと云ひ歸られたりと告ぐ、何事おらんと封押し切りて見れば一葉の名刺の裏に

「拜啓　君は俗塵ヲ洗ふて去ル歟生ハ永久君ト手を斷タサルベシ

十三日　小川　八田君」

とぞ鉛筆にて記されけるわれ人前をも憚らず暗涙に咽ひ感慨正に尽きざるものあり洗思默想萬々之を久うせり

因に名刺は先きつ日横手博士と共に參觀の爲め來院せられたる衛生試驗所技師石津利作氏のものなりき

○

病みて尙牛の肉にはあきさりき

トモ食ヒすると人や笑はん

恩師は慶應元乙丑年生れ給ふすおはち此句のある所以なり

○

八田君に謝す

弓藥の後姿（ウシロスガタ）もみたしとて

鏡を背（セナ）にたてさせにけり

○

岡本君に感謝す

吾母(タラチネ)は我子を思ひ我はまた
兄弟(ハラカラ)とのみ思ふまで
君に信託(タヨ)む
因縁(エニシ)あやしき

岡本京太郎氏は恩師か産婦人科兼小兒科長たりしとき醫員として膝下に親炙し日夕其教訓を忝ふしたる人にして一朝事によりて金澤病院を去り新に金城療病院を立て或は獨立して小兒療院を起すに及ふも常に恩師の許に出入し師弟と云はんよりも寧ろ一族の觀ありき、而して恩師の病み給ふや佐々木先生と共に日夕主として診療の任に當りまた遺憾なかりし篤實勤勉の人也、其恩師か生前あつく信じ給ひし所以のもの亦偶然にあらざるを知るべし

○

以上おのか記憶を記シタルアリ書くにつれオノヅトイヅルモアリ即興モアリ直情モアリマチ〳〵ナリ

四十一年六月七日正午十二時

○

毎朝掃除の節が一ぜを顔にあつれば
顔にか一ぜかふりて暫し避けんかな

浮世の塵を掃ひ去るまて

○

六月七日勝尾町林氏よりアヤメトイチゴトヲ贈らる

むまごりのあやめの色のむらさきと
しろにはわれもひきろわつらふ

○

かくなりてまたるゝ者は明鳥

以上「五月五日百福の茶碗」以下はミシン入かる卷紙の端に仰向きながられぢりがきし給ふ處にしてまゝ讀みわけがたき文字あり、たま〳〵何候の際看護婦して特に示されけれは是れ絶好の記念かりと思ひ拜借の聲をあとに持歸り横着にも返したてまつらすして過こせしが越えて幾日「覺え書き末の松山ならなくにかりて返さぬことはゆるされ」との一首を賜はり是非返せよとの仰せあり奥樣よりも重れて之を申さるゝまゝ是非かくも「よもすがら偲ひまつらん覺書返せの御諚つれかかりけり」と申上け恰も手中の珠を取られたる心地していとむしくも返し奉りぬ、其節看護婦に折を見て讀みにくき文字を聞きむく樣にと深く頼みつるもつい〳〵果さすして御他界を見るに至れり、尚御葬儀後之を見奉らんとするも混雜の折いづこへ取り紛れゆきしや如何に探かしたてまつるも見當らさるこそ重れ〳〵の遺憾かれ

○

六月六日

雨戸繰る音と聞きしは
雷(ハタガミ)の五月(サツキ)の空に怒るなりけり

○

雷はいかり給ふか知らねども
　恵の雨の露ぞ嬉しき

○

贈られし人は病に勝尾町
　治(ナオ)るも早し庄平のぬし

○

かく迄に病みたをけては我にさへ
　親と思はて泣き出しけり

こは昨年天長節に生れ給ひし御次男勝尤様の泣き給ふをよめるものなり

○

八日午前二時

かくなりて待たるゝものは
　くだかけの聲と朝日の光りなりけり

○

六月十六日　二三日前より下痢

已が口慾(ヨク)に從ひし身はたちまちに

おのれ苦しむことゝなりけり

親の言醫師(クスシ)の言にそむきてし

我は面なし何といはゞや

贈りたる人の親切たうべんと

理屈はおのが勝手なりけり

某氏より苺を贈る攝り給ふこと僅に三五顆すゝはち腹痛下痢を起し給ふ、苺や御就床後人の屠之を贈るものあるも佐々木教授より種子があるからよくないとて禁じ給ひしものゆゑ

○

六月九日　八田氏に謝す

花は見よつぼみもあるぞ

いれものは病冷せとくまもなき

贈りをなせし人は此人

夏の日の萎れやすきを思ひ、大輪の薔薇花を入水れし氷嚢に挿しこみて捧げつるを詠み給へるものゆゑ

○

背面の達磨見むとてあざけりし

因果てきめんにらまれにけり

君が脊のしたしくもてし百合と菊
心ゆかしくうちながめけり

覺に書き末の松山ならなくに
かりて返さぬことはゆるされ

ろの國の心も花にうつらふか
百合の花びら皆うはむきにして

○

達磨の賛

其昔梁の武帝にこたにつる
知らんはいとの一言葉（不識）
今もまなこにあらはれて（眼）
大師は玩にいますなり

六月九日は我が亡父の命日ふり磁製達磨の一軀恩師が枕頭に捧げまつりしにいたく喜ひ給ひ床上高く置かれたり、先是今春靜村畫會の爲に斡旋の勞を取られし宮田教授に恩師特に「背面之達磨」なる畫題を醫局にて申込まれたることあり、抽籤の順により此時畫箋未た成らさりしも、かれて自ら撰ひ給へし畫題今や奇しくも面壁九年ふらぬ仰臥三昧の御身とふらせ給ふ恩師か感また甚た鮮少ふらさりしを思ふべきふり。

○

罪深き者と思へば中々に
　かゝるなやみのいとゞかるけれ
苦しみをかへて樂しむすべをさへ
　覺ゑつる身のありがたきかな

恩師か修養の深き悟道のほど仰くべし

○

六月十六日

故郷の親族(カカヲ)來ませりまだ顏は
　見ねど先だつ我涙かな
五月晴故郷よりは親族來ぬ
　俄の雨は涙なるらん

○

勝利のくれし花をばよく見れば
　つゝじに野菊梅にわらびよ
我子等も人まねしけんいづこよりか
　花をもらひて我に贈れり

○

日々に花はあせゆく見ゆれども
贈りし人の心變らじ

○

六月十八日

終日降雨

下痢とまりたれども熱稍高し(但八度台)されど氣分の惡しき程には至らず

昨日八田夫人大山木を持ち來らる

きもむかふ心盡しの花なれや
げにも氣高き姿かな

達磨大師に相應はしく
直くに御前に捧げける

さきに恩師自ら筆把り卷紙の端に認め給ふや佐々木先生其愼むべきを戒めらる、爲に「六月六日雨戸繰る音」以下は時折看護婦に口授筆記せしめ給ひたるものなり

＊　＊　＊　＊　＊　＊

附たり

六月廿二日午後四時半途中萩、菊、太藺「カイモ!」、など求めて恩師の許に行く、待つ間ほどなく岡本氏來診、共に恩師の側に侍す痩軀眞に骨と皮ばかりにおらせ給ひ、蔫骨下端と踵骨櫛后面とにはハヤ褥瘡生じあるは暗褐色あるは赤色、われ驚きと悲みのあまり謂ふ所を知らず、恩師か偏に身動きだに

し給はさりし御心中を偶ひて双眸に露の宿るを覺えず知らさりき

床には靜村が背面達磨の幅新にかゝげられ大山木の第一花既に枯れて見る影もなし、われ挿し代へんとしてフト之をむしりとり恩師より「嗚呼心ふき事してけり」といたく不興を蒙りしか稍暫らくして「持ち來りし人によりて之を取る亦面白し〳〵」と再ひ三たひ繰返へし〳〵微笑ませ給ふ。

重れて宣はく先日も看護婦の之を取り去らんとするを押しとゝめしが、すべて花は咲き匂ふときのみ之を觀るものかは其のあせりゆき散りゆくさきをあはせ見るこそ眞の花見る人の情けなり、さきほど小使中村の歸るにまかせ君の許へ名刺に其由認めておくり届けしが未た手にせざる？云云との御物語あり、終て恩師入院の儀に就き岡本氏が眞情を叩き更に之を御隠居樣に傳ふて歸る

名刺の全文左の如し

毎々令夫人御手づから御珍らしき花卉御持參被下誠に感謝の至りに存候」又一昨夕は貴下態々神戸よりのぱなと山形產とかの櫻實誠に珍らしく拜見致候彼國はいざしらす內地のものにて箇程の大サのものは初めてに御座候唯口之ヲ嘗ムルヲ得ザルヲ遺憾と存候のみ　拜具

背面の達磨見に來よ五月晴

但し岡本氏と打合せ御出の方一番都合よろしく候

令夫人の持參し給ひしタイサンボク(?)ノ第二の花咲きぬ或日看護婦其フルキ花瓣を取り去らんとしければ之を押止めて

萎れたる花瓣さにも殘し置くは

人の心の情なるべし

右に付人生の榮枯を說き病中ヨケイな駄辯を弄したり　呵々　六月廿二日午後飯後

八田雅契机下　（本日宿便を浣出して快甚し）

○病床筆談

口上

過日少しく來客と長談致し大に醫師に戒められ候小生よりは筆談とトリキメ候まゝ諸君子御察恕アランコヲ乞フ

右の次第にて大抵の方は御面會謝絶致候次第に付他の御知己等には可然願候

月　日　勝陳

こは小學生か持つ如き罫なき西洋紙の一小ノートに仰向きなから記るし給へる「はしがき」あり、單に「月日」とのみあるも六月の末つ方なし給へるものに係れり

○七月二日午後二時（櫻井教授御來訪）

過日來度々御尋被下いつも失禮にのみ打過き恐謝に不堪候「本日は又態々御來訪被下殊に感謝仕候貴下にはいろ〳〵自分身上に付願度儀も有之御迷惑なから御相談願度義も有之過日一寸佐々木教授まで右意申述候事も有之候へ共いつれ夏休後幾分病氣の輕快をまつて委細申述度考に候

○七月三日夕五時齊藤君

近頃益輕快御蔭にて樂に相成り家内中悦居候

今般は榮轉の由ナレ𪜈誠に殘念に存します御多用中態々御尋は恐縮に存します」

○御禮にては誠に恐縮に存します」尙高岡小林軍醫正殿によろしく御傳言相願候

金澤病院内科第二部醫員齋藤房治氏聘せられて高岡東診療院に赴く挨拶の爲め參趨恩師すゐはち其數次宿泊して病を看侍せしを謝し給ふゐり

○七月四日夕八田君

直に歸る（紫陽花――歌あり）

○七月五日夕四時丹羽君

先日來度々御足勞相かけ其頃よりも余程輕快致し候段諸君の御蔭と感謝の至りに不堪候

本日は態々御來訪被下難有存候昨日佐々木教授見舞ハレタル𪜈よりハ氣分あしく候へとも

最高体溫七度七分位に御座候（近頃は五分ニ上ラス）本日ハ粘液容易ニ咯出し難くシカモ隨分

多量ある爲メ困難致候へとも唯今疲勞の爲メカ一寸睡眠致候故少シ樂に相成候」

右は序ニ教授ニ御通し願候

（側腹部ノイタミモ左程デナキヿモ）

○七月六日八田君（夕五時

先日君恙アリシヲ知らすにしはしとも玄關に佇マセシム誠ニ心なき次第なりき」

其節は又々花下され大に精神を慰め候君か門を出つる頃余か感情迸出したり

いはく

紫陽花の色はかはれと
かはらぬ君か心の誠なりけり

別ニ紙ニ書さんとすれともいまた其勇氣なきは殘念なり」

昨今は御快きや加餐セヨ〳〵〳〵

○七月十二日十一時鷲山君來訪

先般も諸君と御來訪の處御面會不致本日乞睡眠中にて非常に御マタセ候由欠禮千萬に候

蓄音器の儀いろ〳〵御周旋殊にありかたく存候　十四枚　上田先生にもよろしく願候

五六日體温昇リシ爲メカ多少不快ナリシカ昨日ヨリ又下リ坂トナレリ食機ハ相變ラス

振フ夜間安眠セリ

○七月十五日午後五時半八田君

何カ忘レマシタガ古今？人物ノ短評ヲセルモノヲ尊宅ニテ見タリいつか使ヲ上ケルカラかして下サイ

日曜ノ出勤ハ御察シ申ス……

貴家にて見たる人物評ハ丁度此位の帳面にてムシロ人の裏面ヲカイタルモノヽ樣ナリキ

（七花八裂の著者カ？）

恩師か厚情身に泌みて、事ありけろ後御旨に從ひて尙二ケ月間引續き平常の如く勤めたる小生は

更に四月十八日附の退職辞令を手にして廿一日まで勤務しぬ、仝廿六日恩師親しく病院よりの歸途舊廬茨木町を過きられ懇談數刻、翌廿七日夕雨中又過きられ今夕金谷館に於ける送別會早々出席せよとの態々の御案内あり、其折見給ひたる人物評(人物畫傳ノコナリ)モ―一度見たいから是非貸せとの仰せ、小生はいかに昨今稍輕快あらせ給ふとは云へ讀書おど以ての外惡しかるべしと思ひ煩ひしも切ふる御詞我身がかれての病床の徒然おりしを思ひ出しつ、翌朝人物畫傳に添えて時事新報社發行日本美人帖及醫藥疾患俳句集を膝下に届け上りぬ、

○七月十八日午後越野君

御出張の由御かわりなきや」

宗叔町に御轉宅ト承ル多少御近ク相成候近々又々御出張にや

(此間に越野氏の答へたる記事あり)

耳ハナントモアリマセンカラ貴下より御口話ナサレテモよろしふ御ざいます

只今ハ食事中にて長ク御マタセ失禮いたしました」先日衛生會の蓄音機ノ圓板一兩日拜借致サント鷲山君ニ托シ候處御不在中にて失望したり」イヅレ郡部ニ殘してあるので御ざいましよう」

○七月廿一日中多儀一郎君

先つ〳〵專門學校入學を許可サレ御芽出度限りに候」

……」三部ニモ受檢サレタル由、規則ニヨレハ一校(タトヘハ專門學校)ニ入學ヲ許可サレタルモノハタトヘ他校(例ハ高等學校)ノ試驗ニ及第スルモ取消サルヘシ」トアレ

吾校ニテハ可成志望者ノ便宜ヲ計ルヿニナリ居レリ即チ若シ高等學校入學許可トワカレバ即日專門學校エ取リ消シヲ申込ム樣ニスルナリ」

二三日内ニ關君來レハ右依賴シオクモ可ナリ

○七月廿三日午後二時半頃關君來宅

いろ〳〵御都合もありしならんによく早く見にられました」

いろ〳〵品々御持參下されありがたく御座います」

當地も土用から急に暑氣增しました割合に自分は感しませんか昨今に至り○○（二字不明）きました」途中隨分ヒドー御ザイマシタロー」相變らず强壯ですか如何」

サテ病氣ハ數年前ヨリカヲテ豫期シテ居リ不斷用心ハして居タガ何分奉職の身トテ十分ニ攝養ニノミ盡クスヲ得ズ殊ニ今春古キ八田助手故アリ辭職（四月末）セシ故非常ニコマリ間もなく（五月七日）タホレタリ爾來（末頃ハ余程よくなれり）六月中ハ殆ト自ラ何ニモ知ラサル位

先頃三十七度代迄下リシカ近頃八度代トナリテ少しく不快ナリ然し食氣割合ニかわらず是レノミカ今日迄身ヲタモツ所以ト思ハル（一時ハ岡本君ニゼクチオンノヿ迄賴みました）

幸ヒ自覺的苦痛なし此分ニテハ新學年頃迄ニハ多少面目ヲ改メルト思フ

只今白河よりの御みやげヲタベマシタ」金澤ノヨリムマイト思ヒマス思ノ外ノ處ノモノヲ賞味シテ一段ト思ヒマス次ニ渴望ノ藤村ノヲヤリマシタコレハ又一段十年前ヲ思出シマス口當リノジワ〳〵スルノハ格別デス

關君とは名は格之助、今東京醫科大學に學ふもかつて恩師か家に在り、今夏休暇を幸ひ病床を見舞ふべく來澤せらる、恩師は夙に本郷富士見町藤村のカステラを殊の外賞美せられたりと云ふ、又白河のみやげとは古の所謂奥州白河產の羊羹なり

○七月廿六日有馬近信に

子爵樣直ニ御下行の御意ありしとは誠に恐縮の外無之何とも申上樣無之一同感涙にむせび候事に御座候」病氣の儀ハ追々快方に向ひ胸背ニ氷囊ヲ貼シ仰臥ノ狀態ニ有之候（候間乍憚御放念）へとも幸ヒ食機は割合ニよろしくこれのみ醫師も力ニ致し候」

荷物の儀永々御迷惑を懸け候然し「タンス」ハ尙其儘暫らく御預り願候

尙貴下老臺御職務御苦勞の段恐察致候一同よりよろしく申出候

右封書にて小生名（貴下代筆ト署セラレタシ）

子爵樣とは舊結城藩主水野子爵を云ひ有馬氏はそが家令を勤めらるゝ老臣なり關氏に代筆せしめられたる草案なり

○七月廿六日夕鷲山氏來訪

○院務の御都合ニより夏休中御申合の上一名宛位休暇を取ラレテ可然と存候

○最近の十全會雜誌ハ出來マシタカ（目錄ハ過日見タリ）

○七月廿九日夕六時八田君來訪

貴下近狀如何令閨モ先日御不快の趣其後如何」小生ハ餘リかわりなし昨日より氷囊ヲヤメ

テプリースニッツ冷罨法ニしたり故ニヤ昨夜非常に發汗(顔面、頭部丈け)シタレ𪜈未た短時日なれば未た効を見るに及ばず」

あわずして返る

御就床以來不絶氷嚢貼用せられたるも佐々木先生か旨に從ひ一時P氏罨法にぞおされける

○八月一日朝七時頃太田美濃里氏來訪

太田　様　――――――――　小川勝陳　代筆

拜啓炎暑ノ砌愈々御勇健奉賀候

偖今朝ハ御老體御足勞ノ處小生事五月來より長病にて就褥罷在御面談も出來兼候次第御推恕願候」就而御話の儀は東京ナラハ矢張り大學ハ土肥博士專門ニ有之小生別懇ニ致候間宅にても診察出來可申と存候別紙紹介書相添ゑ申述候也

表

土肥博士殿

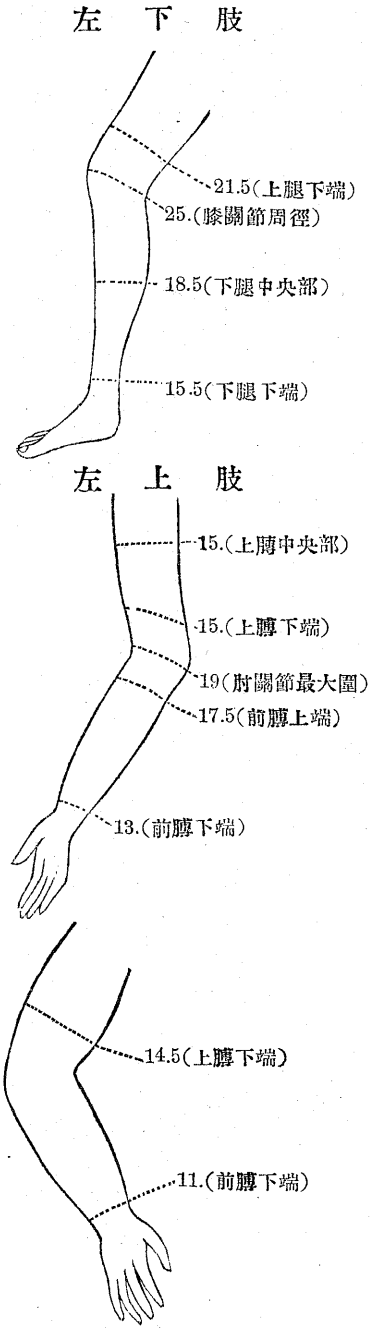
故太田素夫氏の實父美濃里氏ヲ紹介ス

病中餘事ニ及ハス

○八月二日午後五時前八田君來訪

毎々御尋被下其都度花卉御惠與誠に心神を慰め申候

只今ハ食事中にて大ソフおマタセイタシマシタ



勝尤樣右上肢

わが勤むる院よりの歸途先生を見舞ひ御隱居樣並に關氏に見ゆ、折柄石川屋食堂より洋食を運ふあり、承れば今日初めて佐々木先生より許されたるまゝ試に攝らんと思ふ處ふりと、食事了つて「蓬ふから病室へ通れ」との仰せ、早速病床に侍す、稍元氣に見ゐさせ給ふにより われ携ふる處のバンドマスを取出して試に上下肢の太さを測る、恩師小供と較へて見よとの仰あり、測り終つて一寸記るしおけとの旨に從ひかくは記るしとゝめおきたるものなり

○八月二日夜七時半鷲山君來訪

毎日御勤務御苦勞と存候

陸軍の黙呼ハ何日なりしや

過日申上候書籍ハ如何

○八月十九日朝八時半木村博士來訪

先日は突然御珍らしき御見舞品を戴き御厚意難有奉存候

年來豫期(!!!)致居候へ共トウ〳〵ヤラレ申候」五六月頃ハ殆と人事不省なりしか近來は殘暑の苦を覺ゑ申候」然し諸君の御蔭にて大に輕快致候唯昨今多少の Fieberbewegung あり萬事扣目に致居候醫師の忠告に從ヒ乍殘念御目にかゝらず候然し本日は氣分は思の外によろしく御座候

御老母樣始め御令閨樣にもよろしく願上候

八月十九日は金城療病院が創立滿十週年記念祝賀會を擧けたる日なり、博士特に之に列せんが爲め態々大坂より來澤、すゑはち恩師を見舞はれぬ

○八月廿八日

目下看護婦一名欠員にて一層御困りの事と存候サテ目下赤十字出身にて熱心のものあり目下管理部にて赤十字の初任は俸給若干出シ得ルヤ(當人ハ望ミナシトハイヘ大抵格式アリ)右明日にても御問合被下度候別人ナラス目下小生方ニ居ルモノニ候」尤も小生方の常備見當り次第奉職シタシト申候

(此間に鷲山君の記事多少あり)

……」

山田講師の話は昨日山碕氏よりはなしありました」小生も夏休後の樣子によりいろ〳〵所決イタサント思居りマシタ」

八田君を

近頃妻君如何一同大切ヲイノリマス」

小生多少熱ケイリューノ氣味アリ下熱劑明日より參る由

あごの下うるさきものは
なになりとなづれば
たのかひげにぞありける

得ル所ノモノハ失フモノ失フ所却てコレ得ルトコロ亦是熱餘の譫語!?

是れ熱餘の譫語にあらずして病餘の道話なり

此際昨夕本多町にて上田教授腕車轉覆左大腿骨幹部骨折の爲に即夜宮田外科入院麻醉正復せられたることや、去十二日夕病理教室にて篤學なる小原講師突然裂帛之響ありたるも驚き給はざりしことや、

或は……或は不日彦三町轉寓のことふど申上げぬ

○

欠席屆日付は學校の方は十一日と致候病院の方何か申候はゞ○日は貴下の代筆ニテ願候

こは九月十四日夕鷺山氏來訪の際記るされたるものなり、日頃の流暢ふる手蹟に似もやらず、ピリ〳〵と慄ひ勝にて怜も書痙患者に見るか如き趣あり、中一日を隔てゝ恩師則ち亡し、噫

餘興

うづ〳〵と蛙に似たるウガヒかな

(庭前池中奇蛙あり聲甚た奇なり故に及ぶ)

田宮氏に謝す

人知れず床に入れたる神の守護（もり）

人の誠の有難きかな

此「餘興」と「田宮氏に謝す」とはノートの結末ゐる表紙の裏に特に記るしおかれたるものなり、

○追悼法會

來廿五日午後一時ヨリ天德院ニ於テ故小川勝陳先生追悼會可相營候間隨意御參詣被成下度候

十月廿三日　門下生一同

＊　＊　＊　＊　＊　＊

秋漸く深く天地寂寥として思ひつもる月あかき一夜かねて恩師か膝下に侍して親しく其教訓を忝ふしたる門生、岡本京太郎、越野義三郎、婦人科醫局鷲山岩佐鷹見の三氏及八田の六名打集ひ謹んて恩師か追悼法會を城東金龍山天德院に於て營むべく相圖り各其分擔を定めて他方に在る門下生一同に移牒して其賛同を乞ひ越ねて廿三日北國北陸両新聞紙上に右の如き特別廣告なし廣く隨意參拜せられん事を希へり

廿五日午下、恩師同窓の親友小林文泰師を筆頭に恩師を景慕し恩師を追惜せらるゝ校院職員始

め受驗生、學生及看護婦の志ある人々簇々參集、約九十名に上りぬ

正面なる須彌壇上には佛前

「空　智德院殿頓悟勝陳居士」

なる靈牌に添へて寫眞を安置し、香華湯燭茶菓珍饈を辨備し、二時を報するや殿鐘三會三十余名の僧衆着席、天德院住職押野玄壽老師大導師として嚴かに禹中歎佛勝會を修めらる、一同跪坐稽首いと淋しげに故人を追望し懷舊の情限りなく轉た感慨に堪へやらぬ面持あり、午時、本尊上供、すなはち小林文泰師、受驗生總代辻井氏、學生總代松村氏、清水李平氏(岡本氏代讀)、看護婦丹上子門生總代八田氏、飯塚忠男、菊地文岱両氏(吊電、鷲山氏代讀)の順序にて恭しく靈前に進み出て、各祭文を朗讀す滿堂肅然として聲なし

祭　辭

維時明治四十一年十月廿五日齋戒謹テ故從五位勳六等小川勝陳君ノ靈ヲ祭ル顧レハ余ノ始メテ君ト相知レルハ實ニ明治十六年ノ昔ニアリ爾來常ニ學級ヲ同ウセシト雖モ出身學校ノ異ルト寓所ヲ同ウセサルヲ以テ未タ深ク交ルニ至ラサリキ其后學級漸次進ンテ大學ニ入リ組織學實習ノ時ニ至ルヤ偶然君ト机ヲ隣ニセシヨリ相言ヒ相語リ意氣投合終ニ日常相往來スルニ至レリ然レモ尚寓居ヲ異ニセルヨリ隔靴ノ憾アリシカ偶余ノ隣室ニ空室ヲ生セシヲ以テ往ヲ君ニ告ク君即チ來リテ之ニ移ル爾后數年余ノ京地ヲ辭スルニ至ル互

ニ居ヲ諭ヘズ深交兄弟ノ如シ君人タル温厚篤實甞テ圭角ヲ兆ハサズ同級皆君ヲ目シテ君子トセリ壬辰ノ春余君及土肥慶藏君ト倶ニ手ヲ携ヘテ筑波山ニ登ル途次君ノ家ニ過ギル君笑テ曰ク我屋斯ク破レ我國斯ク荒ルト雖モ私ニ誇ル所ハ平和ノ之ニ住ムニアリト土肥君余ニ謂テ曰ク小川君ノ小川君タル所實ニ茲ニアリト君家道中比饒ナラズ學課ノ餘暇敎鞭ヲ某學校ニ執リ以テ學資ヲ補フ卒業試問ノ將ニ始マラントスルヤ余君ニ勤ムルニ一時休講スルヲ以テス君肯セズシテ曰ク豈私事ヲ以テ積年ノ職責ヲ忽ニスルヲ得ンヤト余等ノ復習孜々吃々タルノ時ニ於テ君獨リ悠然出講一日モ之ヲ廢セズ已レノ卒業席次ヲ犧牲ニ供シ毫モ顧ミル事ナシ君ノ篤實概ヲ斯ノ如シ今茲春余遠ク鎮西ニ遊ビ歸リテ君ノ病褥ニ臥スルヲ聞ク即チ倉皇往テ之ヲ訪ヒ贈ルニ携ヘ歸レル風土寫圖數帳ヲ以テス君之ヲ手ニシ喜色面ニ溢ル然レモ顏色憔悴形容枯槁余私ニ之ヲ危ム余君ヲ煩ハサン事ヲ恐レ故ラニ之ヲ診セス其疾ノ何タルヲ知ル能ハズトモ食餌漸ク加ハルヲ聞キ已ニ恢復期ニ入ルモノトシ再訪ヲ約シテ歸ル爾後時ニ書ヲ以テ病況ヲ問ヒ其漸次佳良ニ赴クヲ知リ爲メニ大ニ心ヲ安シ且塵事蝟集永ク君ヲ訪ハザリシカ一日君ノ疾ハ不治症ニシテ且頗ル危殆ニ迫レルヲ聞キ驚テ之ヲ省セントスルノ朝忽焉君ノ訃報ニ接シ茫然自失之ヲ久ウス嗚呼哀哉嚮日ノ面會ハ是レ實ニ永訣ナリキ君家ニ奉仕スヘキノ老萱ト覆育スベキノ幼孫トヲ遺シテ而シテ遠ク逝ク其心中果シテ如何ゾヤ然レモ君ノ金城ニ來ルヤ學生ハ君ヲ尊テ良敎授ト云ヒ病者ハ君ヲ敬テ好國手ト云フ葬ニ臨ンテ供花數十柩ヲ送ル者千ヲ以テ數フ蓋當地

ニアツテ稀ニ觀ル所君異鄕ニ在テ此盛儀ヲ享ク是レ偏ニ衆人カ君ヲ尊敬スルノ致ス處所謂死シテ餘榮アルモノ君亦以テ瞑ス可キナリ今ヤ門下諸氏君ノ爲メニ祭事ヲ脩シ余亦席ニ陪スルヲ得往事ヲ追懷シテ感慨ニ堪ヱズ聊カ數言ヲ陳シテ醪羞ヲ侑ム靈魂尙クハ來リ饗ケヨ

同窓學友　小林文泰謹白

追吊ノ辭

梧葉空シク散リテ秋ハ益悲シク虫聲徒ラニ嘆レテ秋彌々哀ナリ吁先生先生御長逝シ玉ヒショリ既ニ五週ノ日月ハ最モカナシム可キ裡ニ過キサリヌ　吾人先生ノ鞭下ニ侍セシ事四星霜今漸ク校ノ胎内ヲ辭セントスルニ當リテ再ビ先生ガ御温容ニ接スルヲ得ズ今親シク先生ノ靈前ニ座シテ衷心悲哀ニ堪ヘザルモノアリ先生永久ニ在サス吾人何時ノ期先生ノ鴻恩ニ報ユル謹吁謹デ先生ノ靈前ニ白ス

受驗生總代　辻井禮太郎

吊小川教授ノ靈

謹ンテ我敬慕スル恩師小川教授ノ靈前ニ白ス　先生曩ニ疾ヲ得テ又起ツ事能ハサルニ至ルヤ從容トシテ袂離ノ辭ヲ作ラル言々皆ナ肺腑ヨリ出テ給ヘルモノ聞クモノ誰カ嗚咽歔

歔セサランヤ今ヤ先生ハ泉茶毘一片ノ烟ト消エ遠ク幽明界ヲ異ニセラル仰天俯地シテ訴フルト雖モ天地爲メニ答フルナク魂魄長ニ去ツテ再ビ先生ノ温容ニ接スル事能ハズ思ヒ茲ニ至レバ紅涙ノ巾ヲ濕スヲ覺エサルナリ先生夙ニ東京帝國大學ノ業ヲ率ヘ尙大學ニ止リテ其微ヲ極メ羅典ハ先生ノ最モ得意トセラレシ所ナリキ先生ノ來テ本校ニ職ヲ執ラルヽヤ多年研鑽セラレシ學一視同仁ノ德能ク後進ノ師表トシテ衆庶ノ敬重ヲ博セラル爾來本校ノ敎授トシテ十數年其間一日ノ如ク後進ヲ掖擠薰陶セラレタル其効績ヤ甚タ偉大ナリト謂フ可シ今ヤ鬼魂空シク去ツテ其ノ所ヲ知ラズ然リト雖モ先生ノ薰陶敎化ヲ享ケ現ニ社會ノ活舞臺ニアルモノ數百ヲ以テ數フ先生死スルト云ト雖モ又瞑スルニ足ルベキナリ彼ノ梵鐘ハ無情ノ響ヲ罩メ颯々タル松風ハ萬斛ノ悲ミヲ語ルニ似タリ噫悲哉世ハ今ヤ蕭殺ノ氣萬山ニ汎ク皎月千里古人ノ心ヲ語リテ天下ノ秋ヲ知ル若シ夫レ沈々トシテ夜更ケ傷心慘目シテ思ヒ先生ノ精魂ニ至ランカ髣髴トシテ先生ノ形骸ニ接スルガ如シ死モトヨリ天ナリ命ナリト雖モ悲ミ何物カ之ニ加ヘン門下生一同相謀リ本日ヲトシテ奠ヲ布キ先生ノ爲メニ靈ヲ吊ハル先生來リ享ケヨ茲ニ謹テ在校生一同ヲ代表シテ先生ノ靈ヲ吊フト云爾

明治四十一年十月廿五日

金澤醫學專門學校在學生惣代　松村喜一

祭小川先生文

明治戊申十月念五日某君等爲醫學士從五位故小川勝陳先生行追遠之擧予辱與先生締交有年於茲區々之忱不容已於中也敬薦蘋蘩以申追慕之私恭惟先生早歲入大學刻苦淬勵其業抽等儕既而爲金澤醫學專門校教授兼金澤病院婦人科部長皆以副職著稱先生爲人謙以接人端以持身不敢爲表襮之行毫若不知人爵之爲何物者而識見之超詣節行之淸絕有人不及者性甚孝家庭無閒言雖婢僕皆服其德久而不能去暇則于詩于歌以遣興若辭世之句雖咄嗟之作亦足以見矣傍嗜禪々有大小南北之異妙悟透徹及上乘若先生者無幾予亦好禪故與先生意氣相投固不可忘其所繇焉其音容恍在眼前而今也忽焉爲隔世之人洵可悲已今某君等行追遠之擧先生輾然於無何有之鄉將曰愼終追遠民德歸厚予於是作拓魂之歌曰

所學斯履容壇罄務志存弘濟術足起痼奈何彼蒼奄棄其年精魄歸存豈滅九泉。天德之院松杉鬱々天高地宏音容髣髴

嗚呼尙饗

清水李平謹撰

吊辭

爰に恭しく故小川勝陳師の君の靈の前に謹みて申す惟ふに師の君には我が石川縣金澤病院に於ける婦人科の長として永き年月を一日の如く奉職せられ幾多の患者を救ひ給ひたるは慈母の赤子に於けるが如し其か中に日本赤十字社石川縣支部に於ける數多の看護婦

を養成せられまた金澤病院の改設に際してもいとゞ盛んに治療を施し功さをゝ奏し給ふて共に邦家に盡し給ひにけるも痛はしや折柄病魔の襲ふ所となりて如何なる治療も功を奏せず時は明治四十一年九月の十七日盡きせぬ此の世の名殘を惜み遂に果敢なく消へさせ給ふは洵に惜しみても猶あまり有る不幸にして誰か哀みに堪へさらんやされば親愛なる君達には今日しも此の天德院に於て盛典なる大法會を執行せられ數にもあらぬ妾にもいと懇なる仰に寄りて同し席に待べりしも心塞り胸迫り涙に咽ふ斗りにして何をか謂ふ所を知らさりし茲に日本赤十字社及金澤病院看護婦諸姉に代り聊か一音を以て吊辭となし奉る希くは來りてうけ給へよ嗚呼悲哉

明治四十一年十月二十五日　　丹上皆

謹祭恩師先生之靈

人生誰カ悲哀悲痛ナカラムサレド雙親ヲ失ヒ師父ヲ失フノ悲痛悲哀ナルマタ他ニ比スヘキモノアラサルヘシ

生ヲ欣ヒ死ヲ悲シムハ人ノ情ナリ吹ク風ハ依然トシテ無常ヲ傳ヘ逝ク水ハ依然トシテ晝夜ヲ舍メズ其來ルヤ時ヲ擇ハス其ノ行クハ防クニ術ナシ

人誰カ斯ル理ヲ知ラサラン知ッテ而シテ之ヲ悲シム是レ人ノ至情ナリ是レ人ノ至誠ナリ至情ヤ拒クヘクモアラス至誠ヤ枉クヘクモアラズ至情ヲ盡クシテ之ヲ悲シミ至誠ヲ竭ク

シテ之ヲ傷ム我等ハ只其至ラサルヲ恐レ其及ハサルヲ憂フルモノナリ

恩師小川先生ハ茨城縣下總結城之人也其先ハ清和源氏ニ出テ六孫王經基七世ノ孫重房初テ小河ト稱シ重房十九世ノ孫水野日向守勝成備後福山城ヲ創メ六世ヲ經テ隱岐守勝長ニ至リ元祿十六年結城城主トナル爾來連綿第十二世勝愛ニ至リ勝愛數子アリ長勝進後ヲ嗣キ弟勝廉家ニ在リ勝廉ハ即チ恩師カ嚴君ナリ

恩師ハ慶應元年閏五月十六日高ク其第一聲ヲ擧ケ給ヘリ年甫メテ六歲藩黌秉彝館ニ入リ八歲嚴君カ維新ノ偉勳ニヨリ別家被台出新ニ小川家ヲ立テ給ヒヌ十六歲東上獨逸學ヲ修メ翌年東京帝國大學醫學部ニ入リ豫備門ヲ經テ廿三年十二月醫科大學ヲ卒業セラル越テ大學研究科ニ入リ小兒科學一般ヲ究メ又助手トシテ婦人科產科ニ勤メ廿七年十月第四高等學校教授ニ任シ金澤病院婦人科產科兼小兒科長ヲ囑托セラル卅年小兒科長ノ兼任ヲ解キ專ラ產婦人科ニ力ヲ致シ卅四年高等學校醫學部ノ獨立シテ金澤醫學專門學校トナルヤ教職元ノ如シ而シテ傍ラ赤十字社講師囑托トナリ又產婆講習所長トシテ盡瘁以テ今日ニ及ヒ給ヘリ

恩師ヤ我國產婦人科學界ニ於ケル先學之一也初メ北陸ノ野ニ下リ濟生ノ術ニ從ヒ給フヤ因循估息ナル習風尙一世ヲ覆ヒ進テ診ヲ乞ヒ治ヲ求ムル者甚タ尠ナシ而モ恩師ヤ堅忍持久能ク意ヲ致シ誠ヲ推シテ之ヲ濟ヒ之ヲ治シ且ツ夙夜育英ノ業ニ從ヒ諸生ヲ教養シテ諄々倦マス之ヲ扶掖シ之ヲ誘導シ懇切周到ヲ極ム從テ今日斯學ノ發展日ニ加ハリ普及スル

コト此ノ如ク盛ナル實ニ恩師カ貢献與ッテ大ニ力アリト謂フヘシ

早月七日恩師憂然トシテ裂帛ノ響アリ高熱之ニ伴ヒ直ニ病床偃臥ノ人タリ霖雨濛々神ヲ沈メ三伏ノ瘴氣身ヲ熔シテ綿ノ如シ聞ク者痛心焦慮只管其快復ヲ祈リテ止マサリシカ秋風一度到ルヤ死ヲ視ル歸スルカ如ク溘焉トシテ又長ヘニ歸ヘラヌ旅ニ入リ給ヒヌ享年四十有四歳城西泉野ニ葬リ茶毘一片之煙トナシ奉レリ

嗚呼恩師ヤ温容慈顔威アッテ猛カラス天眞流露未タ曾テ之ヲ矯メ之ヲ枉ケ之ヲ飾リ給ハサリキ恩師ヤ品性高潔名利ニ趁セス聞達ヲ求メス常ニ清高ノ誠德ヲ以テ塵俗ノ外ニ超然タルモノアリキ恩師ヤ友情濃カニシテ信義ニ厚ク温籍至ラサルナク懇到盡クル所アラサリキ而シテ恩師ヤ已ヲ持スル頗ル嚴人ヲ待ツ頗ル寛岌々乎トメ只其及ハサルヲ憂ヒ給ヒヌ恩師ヤ父母ニ事ヘテ至孝翼々トシテ日夜只其至ラサルヲ恐レ給ヒヌ恩師ヤ宏量海ノ如ク洋々トシテ百川朝宗同一鹹味ノ觀アラセ給ヒヌ恩師ヤ篤學篤行ニシテ不言之ヲ實踐シ不語之ヲ躬行シ給ヒヌ

爾リ恩師ヤ人格ニ於テ學識ニ於テ行爲ニ於テ趣味ニ於テ我等カ夢寐ニタモ忘ルヽ能ハサル第一人者ナリキ恩師ヤ尋常ノ人ニアラス恩師ヤ達道之士ナリ大先覺者ナリ實ニ恩師ヤ猶春秋ニ富ムノ身ヲ以テ玉碎シ給ヒシモ道ヲ以テ衣トシ道ヲ以テ食トシ道ヲ以テ住トシ一生ヲ貫ク唯道ヲ以テ終始シ給ヘリ恩師カ面目此ニ在リ恩師カ悟道此ニ在リ大ナル哉蕩々乎タリ大ナル哉巍々乎タリ

噫々天高クメ窮ラス地厚クシテ極リ無シ恩師逝キ給ヒテヨリ白駒ノ隙過キ易ク將ニ六週ニ及ハントス秋氣肅殺累日空シク恩師ヲ懷ヒ哀情忍フベカラズ愁思轉タ耐ヘ難シ茲ニ我等門生胥謀リ謹テ齊戒香ヲ燒キ燭ヲ奠シテ聊カ追悼ノ微衷ヲ表シ報恩ノ誠ヲ致ス恩師カ英靈尙クハ髣髴トシテ來リ之ヲ饗ケ給ハンコトヲ證頓首再拜門生一同ニ代リ敬テ白ス

明治四十一年十月廿五日　　門生總代　八田智証

吊電

遙ニ追悼ノ意ヲ表ス　　飯塚忠男

謹ンテ御靈ヲ祭ル　　菊地文岱

終て導師拈香々語

干茲　恭惟　金澤醫學專門學校有志諸君同機相求本日就山門喜捨淨財爲故小川勝陳先生智德院殿頓悟勝陳居士修如在之法供養因使老衲拈一炷之心香正與麼時感應道交之一句如何爲驗

心境如々忘己躬　　本來自性悟眞空
請看智德圓成處　　秋老千山霜葉紅

更に修証義遶行畢て大回向せらる、遺族として令息勝利樣、御隱居樣、奥樣、令孃加女子樣、次男勝尤樣、次て學校病院職員總代として高安師、友人總代として小林師、門生總代として越野氏、順次燒香し了つて大導師衆僧と共に退式、村上教授宮田教授を始め各參拜者我も〳〵と隨意拈香して英靈を偲ひ追悼の誠を致す、折しも雲間をもるゝ夕日照りつ曇りつ感更に深きものあり

佛事の後岡本氏立て一場の挨拶を述べ、記念の爲に堂前にて恩師か靈牌を中央に一同撮影せり

各がじし散り行く人の影薄く夕靄に包まれて秋の日の暮れやすき松聲いと靜なり

此日參拜せられたる主なる人々は高安師、小林師始め山碕、村上、宮田、石川の諸教授、村田、佐々木、中島の助教授、病院各科醫員等にして、小林師の小松より上野貞吉氏の高岡より來會せられたるは特に謝意を表する處なり

又山碕、金子、村上の三教授、小林師、清水杢平、岡田剛吉、上野貞吉、島田吉三郎、中村顯、森田齊次、木下克雄、千葉玄也、山田義忠、田中一次郎、福岡喜洋、池田菱吉、舘保二、猪木彦助、谷口長松、秋山八百藏、酒井利勝、臼井丈吉、島崎佐次郎の諸氏並に看護婦有志諸子より、或は個人として或は發起人として其擧を贊し其資を補け靈前に供物を捧けられたるは直接其衝に當りたる我等發起人一同の深く感謝措かざる處なり

因に病後山中温泉療養中なる佐々木教授よりは特に手書して參拜の禮を缺く旨いたみ給へり

○遺骨奉安

「あればとて頼まれぬかな明日はまたきのふとけふの云はるべけれは」とはげにも理なるかな、昨日と過き今日と暮れゆくほどに月日の旅に關守なきハヤ七七ケ日にゐなりにける

霜月二日午下三鐘、われ遺骨を擁し奉り令息、未亡人、藤澤氏母堂と俥を列ねて天德院に向ひぬ、曇り出てたる空合の秋風老いていとど身に泌む思あり、杏壽老師親しく拈香看經、其聲冴にて白雲に乘し帝鄕に遊ふ心地せしこそいみじけれ

ほのくらき本堂の裏香煙靜に立ちのぼる處、內佛のかたへに納む甕二ツ木目も白き桐の匣、いと安らかに眠り給ふはうつし世に殘させ給ふ師の君かあはれ最後の御片身

されと恩師か誠德は問はれても言はれぬ梅の香なり、山河尙響を返へすさへあるに、まいて眞心こめて仕へなばなどで髣髴顯はれて芳香馥郁賜はらぬ事やあるべきあらずやは

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

附、法號重複之事

恩師か葬式を行ひし妙慶寺は淨土宗にして追悼會を營みたる天德院は禪宗なり而して恩師か祖塋は禪宗にして六斗林玉泉寺は時宗なり、初め恩師永眠し給ふや直に御隱居樣の旨に從ひ不取敢玉泉寺に報しぬ、玉泉寺現住は恩師と仝縣の人にして恩師の宅に來往かねて家族の方と面

識あり、乃ち寺は……との尋に應して其時宗なるをも知り給はさりし御隱居樣には生前の欵に因みて玉泉寺をと申されけるも折惡しく住職不在なりければ良き寺世話せんとて妙慶寺を〻指定し來りぬ、葬儀委員始め我等亦妙慶寺の淨土宗なるを知り不思議の思致せしも匆忙の際とて詳しく之を質しもせず、葬儀は前後滯りなく之を營み奉れり

一七日の中陰にあたり端なく妙慶寺の禪宗にあらさること及ひ玉泉寺亦時宗なること御隱居樣の知り給ふ處となれるも時既に遲く七七四十九日まで約束せる法要の先つは其儘妙慶寺に委し、其れ以後は禪宗なる天德院に賴まんと畧ほ決定せるものから先つ追悼法會を此所にて營み事狀を具して法號の改名を乞ひ、追て遺骨も墳墓の出來るまで御堂に預納することを依托するに及ひぬ

即ち「寂　義山院殿禮譽勝陳居士　位」は妙慶寺住職の附せし法號にして「空　智德院殿頓悟勝陳居士」とは天德院之壽老師の撰ひ給へし法號なり、尤も來春融雪の候を俟つて遺骨の一半は結城菩提所なる祖塋の側に又一半は天德寺畔松風淸颯々鳥言聲關々たる處に葬り奉るべき都合にて法號は則ち後者を以て正とすべきや論なきなり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

遺　言

恩師には世人か所謂遺言なるものなし、唯これありとせばそは五月卅日岡本氏に死後解剖の

事を依囑せられしことあるのみ、曰く我か屍體家族にして容るゝあらは宜しく之を解剖に附せよと、而して恩師や人の死に當りて言を遺すを過まれりとし「人や平素に於ける其一言一句皆是れ遺言にあらさるは莫し」と日頃申さるゝを常とせり、實に味ふへき言なる哉（完）

◎惜むべき小川教授

一昨日物故した醫專校教授小川勝陳氏が生前の逸事は、聽くも心地よい美譚を以て充たされて居る▲教授は結城侯一族の家柄に生れたけれども、維新革命の後奉還金も少く、大學に入るに就いては北堂が非常の奮發を以て、女の命とも思ふ頭のものから衣裳諸道具まで賣拂つて教授の學資とされた程で有たから氏も非常の苦學をして大學を卒つた▲教授は夙にも博士となるべき資格ある人で有たが、人爵や位階を欲しがる樣な性質の人ではなく非常な孝心深い性で有つたので、暫時でも海外などへ踏出して、年老いた母君に心配をかけ度くないと、少しも現世的の名譽榮達を願はなかつた▲去れば土肥慶藏博士なども教授を評して、近世稀に見る聖人だと敬服して居た、酒も煙草も口にした事なく、遊廓などへは夢にも足を入れた事が無い▲見かけは邊幅を飾らないので何處の小使かと見にる麁末な風采で有つたが、其高い人格と篤い德望は、不言不語の間に全校の生徒を心服させて、如何にスキフト其處除けの惡口書生も、この先生に對しては一言の非難をも爲し得なんだ▲先生の道樂とも謂ふべきは、唯一の文學趣味で、詩や和歌や俳句

も澤山作られて居る、今度病氣の不治を自覺された際讀まれた句に「かくなりて待たるゝものは明鳥」▲臨終の間際に北堂の手を握られ咳ぎ〳〵「お母樣のお手は大變熱い何處かお惡くはないか」と自分の温度が降つて居るのを忘れて母堂の身の上を心配されたが、自分の手が冷たいと知つて臨終の近いのを悟つても、何處迄も孝心深い教授は「それなら安心だ」と莞爾した儘息を引取られた▲この親にしてこの子あり、教授の今日あるは全く母堂の教育法に因る、母堂は教授の絶命を知つて泣き立つる孫を抱き締め、小聲に「お父樣の代りに、も一度妾が若返つて立派なものに仕上げてあげる、よい兒ぢや泣きなさるなよ」と老の鼻水を啜られたのには、列み居る人々思はずほろりとした（北陸新聞所載）

小川教授長逝後其遺德ヲ永久ニ表彰センカ爲ニ何カ記念トナルヘキモノヲ遺サントノ企アリ、爲ニ或ハ奬學資金ノ聲トナリ或ハ圖書寄附ノ議トナリ或ハ記念物建造ノ案トナリシカ、遂ニ去四日及五日ノ各教授及門下生ノ會合ニテ銅像（上半身）建設ニ可決確定セリ、尤モ其方法及醵金募集ノ儀ハ完全ナル成案ヲ俟テ更ニ廣ク發表ノ筈ナルカ、其際ハ奮テ御賛助アラン事ヲ、今本誌發行ニ際シテ豫告スルコト爾リ

（雜誌部委員）